

第3章 ハイ・インパクト・プラクティスの充実と学修成果の可視化

1. 各連携校のHIP事例

本連携取組では、「HIPによる教育方法の充実」が柱の一つになっている。本連携取組の特色は、一つの教育プログラムに連携校の学生が参加するという形ではなく、HIPであるための要件を連携校間で定めたうえで、その要件に沿った教育プログラムを各連携校で充実させていくという点である。

2013年度に、『学生の主体的な活動と学修成果の獲得を意識したアクティブラーニング型授業の要件』及び『学生の主体的な活動と学修成果の獲得を意図した教室外プログラムの要件』を連携校間では作成した。要件の内容は巻末資料2を参照されたい。

その後、各校ではこの要件に沿いながらも各校の特色を盛り込んだ独自の教育プログラムを開発・充実させていった。ここではその事例を紹介する。

関西国際大学

グローバルスタディⅡ（タイ/2016 夏バンコク）

担当者：安部 幸志、伊藤 創 実施時期：2016 年 8 月～2016 年 9 月

受講者数：関西国際大学 25 人

ACP 協定大学 12 人（Thammasat 大学、Gadjah Mada/Lampung 大学、Yangon 大学）

1. 授業の目的・目標（身につける知識・能力等＝学修成果）

本プログラムは、日本人学生と「Asian Cooperative Program コンソーシアム」の協定大学の学生が協働してタイにおける安全安心への備えについて学び、それぞれの出身国との比較を通じて、グローバル人材として求められる多様性への理解を身につけることを目的としたプログラムである。

タイにおいては、急激な都市化と地球温暖化による集中豪雨により、地すべり災害・水害が多発している。それらの災害への備えについて、タイ国内においても必要性は認識されているが、住民レベルでの備えは十分ではなく、災害による被害が繰り返されているのが現状である。

そこで、本プログラムではタイのバンコク中心部に位置する協定大学であるタマサート大学を中心として、同様の被害が発生している東南アジア諸国の協定校の学生とともに、災害時の備えの違いについて行政および住民を対象としたフィールドワークを展開し、国際比較を行う。また、事前対策、早期警戒、早期避難、被災低減化についてわが国で培われた知識や経験を活かし、それぞれの国での新たな対策に向けた提案を各国の学生とともに作成する。

2. 授業の内容と方法（活動内容）

①事前学習

- ・災害に関する講義（阪神・淡路大震災記念・人と防災未来センター研究部長、リサーチフェロー村田昌彦教授より）
- ・講義・先行研究の調査から得た知見を通してタイの現状や課題をまとめる
- ・リサーチクエスション、調査方法を設定
- ・上記にもとづいた具体的な調査内容、調査項目（質問リスト）を作成し、検討。
- ・タイ語・文化・歴史の学習（外部講師招聘）

②現地活動

現地での活動は、受け入れ校のタマサート大学の自然災害、防災に関する教授からの講義を中心に、水辺の人々の生活を知る為のフィールドトリップや、持続可能な社会への取り組み（森林の保存）を行っている村への訪問などを行った。

図表 3－1－1 行程表

date		schedule	
		AM	PM
8/27	Sat	KUIS students Departure	Arrival
8/28	Sun	KUIS: see around university	ACP university students arrival
8/29	Mon	Program overview/ orientation	icebreaking /group work welcome party
8/30	Tue	Lecture 1 : Water Management and Flooding Disaster in Thailand 2011 年のタイの大洪水を中心にタイの自然災害について概要	Discussion /reflection
8/31	Wed	Lecture 2 : Environment Disaster and Management 政治的な観点からの防災・危機管理	Discussion /reflection
9/1	Thu	Field work 2 : Bang Krachao Trip	
9/2	Fri	Lecture 3 : Safety in Engineering 危機管理に関する講義	Discussion /reflection
9/3	Sat	Field work : Amphawa Village (river side village) 「水」と生活が密接に結びつくタイの生活を知る為のフィールドトリップ（水上マーケットなど）	
9/4	Sun		
9/5	Mon	Field work : Visit elementary school	Discussion /reflection
9/6	Tue	Prepare for presentation	Prepare for presentation
9/7	Wed	Prepare for presentation	Prepare for presentation 全グループによる最終プレゼンテーション
9/8	Thu	ACP conference	Presentation / reception 優秀グループによる最終プレゼンテーション



活動の様子

すべての活動は、多国籍の学生が混在するグループ単位で行われ、意見交換、プレゼンテーションはすべて英語で行うことを義務付けた（図表 3－1－1 参照）。

3. 成績評価の方法（学修成果の評価）

① 事前学習：ワークシート 10%（リフレクションカレッジに、日本語で記入）

◆関連する一般的な情報
今日これから調べること（建物） 私が調べたのは、旧国会議事堂のアナタ・サマーコム（Old Parliament House）である。 この宮殿は、当時ウィンメルグ宮殿を生活の場にしていたラマ5世が、迎賓館として使用するために1907年に建設を命じた、1915年の完成以来、迎賓館として、国会議事堂として、タイの歴史を見守って生きた、歴史建造物である。美しい彫刻が刻まれ、壮麗なルネサンス様式の宮殿である。 当時の国家予算からすると、1,500万バツを投じられて造られた。ローマのサン・ピエトロ大聖堂やロンドンのセント・ポール大聖堂をもとに、主にルネサンス様式を採用してイタリア人建築家らが設計し、イタリアの大理石を使って造られた白亜の外壁はヨーロッパの城を連想させる。また、建物の特徴でもある中央の大きなドームのほかに6つのドームがあり、それぞれ内側に美しいフレスコ画が描かれている。このフレスコ画は、イタリアの画家ガリレオ・ギニとリコリの作で、ラマ1世から6世までの偉業をテーマにしたストーリー性のある作品である。現在、宮殿内には、伝統的な製法で作られた芸術品が展示されている。ベトナム戦争を舞台にしたヒューマン映画「グッドモーニング・ベトナム」の舞台としても使われていた。入場するためには服装規定があり、女性は適切な長さのドレスまたはスカートに袖のあるトップス、男性は長いパンツに袖のあるシャツを身

図表 3-1-2 リフレクションカレッジ画面（1）

② 事前学習：レポート 10%（リフレクションカレッジに、英語で記入）

②学修目標の設定と活動計画	記入期間：2016/06/01～2017/06/01
◆学修目標の設定 I went to the center with a person in the disaster prevention future and was able to know how important what's called disaster prevention was. It is that the nation raises awareness of the disaster prevention that I felt most important by having learned this time. At first the first is enlightenment of the disaster prevention awareness. Social various main constituents such as an individual and home, an area, a company, an affiliate cooperate to improve a disaster prevention power of the Great Society, and to reduce the damage by the disaster, and it is necessary to plan the development of the people's social campaign to raise all power, and to reduce disaster damage. And the second is the spread of disaster prevention knowledge. Disaster prevention education is important that each one understands natural disaster definitely and can take disaster prevention, disaster mitigation under own precise judgment. By the East Japan great earthquake disaster, there was the example of the elementary school which was able to take the appropriate refuge action by disaster prevention education and the fire drill based on a past disaster lesson, and the effect was confirmed some other time. I am enriched by the disaster prevention education in a school and the area still more, and it will be important that I cultivate right disaster prevention awareness in future. In addition	

図表 3-1-3 リフレクションカレッジ画面（2）

③ 現地活動：ワークシート 30%（1日の学びの振り返りシート）

④ 現地活動：プレゼンテーション作成 10%

⑤ 現地活動：最終発表（グループ） 10%（全体報告会 10/23、11/20）

⑥ 最終報告レポート 30%（e-portfolio に記入 11月末締め切り）

現地活動におけるプレゼンテーション（その準備）については、「チームワーク」「プレゼンテーション」といった対応するルーブリックを用いて、学生の修学成果を測定・評価した（同ルーブリックについては、添付資料 図表 3-1-4 参照）。

4. 授業の成果（活動の成果、ステークホルダの評価、予想していなかった学生への効果など）

本プログラムは、1) わが国におけるさまざまな「安全・安心」のための社会システムへの知識を深め、2) 多様な文化への理解を深めつつ、国際的なコミュニケーション能力と、地域の問題解決に資する能力を培うことを目標であった。

1) については、阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センター研究部長であり、リサーチフェローである村田昌彦教授から、わが国における災害復興で見られる「安全・安心」のための取り組みを学び、また実際に同センターを訪問し、災害時の対策について、わが国の最新の情報と知識を身につけることができた。またその学びを元に、タイでの洪水被害についての講義やフィールドワークで得た知識と比較し、ACP コンソーシアム協定大学の学生と、各国の現状と課題を話し合う中で、さらに日本の防災がどのくらい進んだものなのか、その立ち位置を、学ぶことができた。その一方で、多くの自然災害を経験しているはずの日本人学生が、災害を「他人事」として捉え、最先端の防災対策を、被災した時には、誰かがやってくれるだろう、という意識であることも浮き彫りになった。その意味で、日本人学生にとっては、防災に対する意識を高める良い動機づけを与えられたものと考えられる。

2) については、「ACP コンソーシアム」の協定大学から、タイ、インドネシア、ミャンマーの学生を 12 名迎え、寝食をともにし、また「安心・安全」をキーワードに、数多くの議論を重ねることで、異なる文化や価値観の存在とその違いについて学び、当該国および海外での学習への関心を高めることができたと考える。引率者で本報告の執筆者の個人的な所感としては、1) よりも、この 2) の効果が非常に高かったと思われる。常に多国籍のグループで行動を義務づけることで、すべてのコミュニケーションは英語で行わなければならない状況を作り出し、また活動中に 4 回行ったプレゼンテーションもすべて英語で行った。こうした中、宿泊施設におけるイスラム教徒の祈りであったり、ハラール食を提供する飲食店をともに探したりと様々な文化に直に触れながら、議論の際にも、多くの考え方の違いに戸惑い、その魅力にも同時に気づきを得ることができたと思われる。そのような中、参加学生の日本人学生 2 人は、長期の留学を視野に入れるようになるなど、学生の進路の検討に大きな影響を与えることができたと考える。

5. 課題および改善点

活動内容やプログラムの構成などは、大きな改善点は見当たらず、むしろ、想定していた以上に、内容が濃く多くの学びや気づきを得られたプログラムだったように思われる。

唯一の課題は、日本人学生の英語力である。ACP コンソーシアム大学から参加した 12 人の外国人学生は、英語力が非常に高く、高度な議論を交わすことも十分に可能なレベルであったが、日本人学生は、5 人くらいが、そのレベルになんとか付いていく、というレベルで、そのやりとりに苦戦していた。それに加えて、他の学生が、どうしてもその 5 人に頼ってしまうことになり、かなり精神的な負担は大きかったように思われる。ただ、その一方で、「頼られる」「自分がやるしかない」という状況が、それまで一定の英語力は持ち

合わせていながら、自信を持ってコミュニケーションできなかったという殻を破ることにつながった。

こうした状況の改善には、2週間の活動の前に、英語力の不十分な学生、あるいは希望する学生に向けて、ある一定期間、集中的な語学研修を設定することが考えられる。英語力が十分でないこともあるが、何よりも、「英語を話す」行為そのものに慣れていない学生が多数であり、その **mindset** を変えた状態で活動に入ることができれば、より学習がスムーズに進むと考えられる。

【添付資料】 図表 3－1－4

Presentation Rubric

Instructions: There are 5 criteria to evaluate the presentation. Each criterion has a 6-level description.

Choose the level for each criterion by encircling the description which you think represents the presentation.

	5	4	3	2	1	0
Clarifying arguments	Arguments or main points are very clear, well organized and very impressive.	Arguments or main points are well organized and clear enough.	Arguments or main points are organized, and easy to understand.	To some extent, arguments or main points are organized, so they are understandable, yet some parts still need to be improved.	Arguments or main points are not well indicated, and not easy to understand.	Arguments or main points are unclear, and not understandable.
Logical sequence	Introduction to conclusion is structured in effective way, and its logic is coherent and convincing.	Introduction to conclusion is structured, following the basic parts of presentation (introduction, body and conclusion), and its logic is coherent and understandable.	Process to conclusion is structured following the basic parts of presentation (introduction, body and conclusion)	There is logical presentation sequence, yet its order or structure needs to be improved.	Difficult to follow the presentation because it is disorganized	There is no sequence of information.
Support data, proper documentation/citation	Provides adequate information from reliable sources to effectively support ideas.	Provides adequate information from reliable sources to appropriately support ideas	Provides information/data to support ideas in a correct way.	Provides information/data to support ideas, and the choice of information is appropriate or correct to some extent.	Provides some information/data to support ideas, but not related, also the sources are unclear.	Fails to provide information/data to support ideas.
Delivery	Choice of words and expressions are effectively used. Tone, speed and use of fillers are carefully considered which contribute to effective presentation.	Choice of words and expressions are correctly used as well as tone, speed and use of fillers	Seldom use of incorrect choice of and expressions. Tone, speed and use of fillers are good.	Sometimes choice of words and expressions are incorrectly used. Tone, speed and use of fillers need to be improved.	There are mistakes in the choice of words and expressions. Tone, speed and use of fillers need to be improved.	Use of wrong choice of words and expressions is frequently evident. Voice is not clear and presentation is monotonous
Eye contact, body language, attire	Effective use of eye contact. Effective body language, posture, and attire, which contribute to attractive presentation.	Eye contact to audience is established, seldom returning to notes. Body language, posture, and attire are good enough for the presentation.	Eye contact is used, but often returning to script. Body language, posture, and attire are appropriate for the presentation.	Eye contact is sometimes established, but frequently returning to script. Body language, posture need improvement.	Eye contact is rarely established, reading most of script. Body language, posture and attire are not good for the presentation.	No eye contact, reading the entire script all the time. Body language, posture and attire are not appropriate for the presentation.

【添付資料】 図表 3－1－5

Teamwork Rubric

Instructions: There are 4 criteria to evaluate the presentation. Each criterion has a 4-level description. Choose the level for each criterion by encircling the description, which you think represents the presentation.

	4	3	2	1
Participation in team discussion	Leads the discussion with constructive remarks.	Joins and leads the discussion and gives remarks about the topic.	Joins the discussion and gives remarks about the topic.	Joins the discussion.
Encouraging others' participation during the discussion	Listens to others' remarks, puts them together well and gives remarks which enables others to join the discussion.	Listens to others' remarks, puts them together well, which promotes others' participation in the discussion.	Listens to others' remarks, nodding, showing understanding to others' remarks, which promotes others' participation in the discussion	Listens to others' remarks.
Contribution to group work	Participates in a group work and highly contributes to completing the specific assignment.	Participates in a group work and contributes to completing the specific assignment.	Participates in a group work and contributes to completing the tasks.	Participates in a group work and helps when being asked.
Creating positive atmosphere in the team	Joins the team and supports other members with positive remarks and conduct, and eases a tension if it occurs.	Joins the team and supports other members with positive remarks and conduct.	Joins the team with positive attitude or remarks.	Joins the team without negative attitude or remarks.

関西国際大学

グローバルスタディⅡ（フィリピン/2015 夏セブ）

担当者：山本 秀樹 実施時期：2015 年 8 月～2015 年 9 月 受講者数：20 人

1. 授業の目的・目標

（身につける知識・能力等＝学修成果）

①ねらい

本プログラムは、2 年生以上を対象としたサービスラーニングである。フィリピン・セブ島の山間部のコミュニティを訪問し、様々な貢献活動を通してグローバル化と格差の実態と背景を理解し、社会に生きる自分の役割と責任、貢献可能性を追求していく。

②期待する学修成果

【学修目標】

- ・ 山間部のコミュニティでの生活支援を通してグローバル化と格差の実態と背景を理解する。
- ・ 世界市民としての自分の役割と責任、貢献可能性を考える。

【KUIS 学修ベンチマーク】

- ・ 多様性理解：このプログラムを選択したメンバーや現地で知り合った人々と誠実に向き合い、積極的かつ柔軟にコミュニケーションをとって、共感的な理解や受容的な態度のもとに相互に協働できる関係を築いていくことができる。
- ・ 社会的能動性：現地での活動をととして、何が問題で誰にどのような支援が必要なのかを意識しながら、意欲をもって発展的な貢献活動に取り組むことができる。

2. 授業の内容と方法（活動内容）

プログラム開始前に、「プレ学習」に取り組ませることで、海外渡航へのレディネスと活動へのモチベーションを高めた。プログラムは全体を、「事前学習」「期中活動」「事後学習」の 3 つで構成し、各々に振り返りの機会を設けた（図表 3－1－6、図表 3－1－7 参照）。

プログラムの参加学生は、教育福祉学科こども学専攻 2 年生 14 名、教育福祉学科福祉学専攻 2 年生 2 名、人間心理学科 3 年生 1 名、経営学科 3 年生 3 名の計 20 名であった。

3. 成績評価の方法（学修成果の評価）

「事前学習」「期中活動」「事後学習」の各々の場面で、「個人」および「チーム」での取り組みによる成果を評価の対象とした（図表 3－1－8 参照）。

4. 授業の成果（活動の成果、ステークホルダの評価、予想していなかった学生への効果など）

〈ルーブリックによる達成度状況〉

獲得を目標とするベンチマークの達成状況について、「グローバルスタディベンチマークチェックシート」を用いて、プログラムの事前と事後に、学生に自己評価させた。それらを整理したものが図表 3-1-9 である。「社会的能動性」「多様性理解」とともに自己評価が「上がった」学生よりも、「変化しなかった」もしくは「下がった」学生が多いことがわかる。

一方で、プログラム期間中を通して学生を細やかに観察すると、活動に対する取り組み姿勢や行動の変化、個人やチームによる成果物からは、どの学生も十分に学び成長していることがわかる。つまり、現状では学生自身が成長の手掛かりを得られない状態にあると言える。体験学習プログラム、とりわけサービスマネージングプログラムとして、学生の成長をどのような規準で評価していくかが今後の課題である。

図表 3-1-6 「グローバルスタディⅡフィリピン/2015 夏セブ」活動内容

	内容
プレ学習	フィリピンの貧困やスラムに関するビデオレビュー 海外渡航・現地での生活に関する学習 フィリピン・セブに関する学習
事前学習 (第 1 回から 13 回) *授業時間外学習あり	リスクマネジメントに関する学習 プレ学習のプレゼンテーション 異文化交流計画案(小学校・高等学校での授業案)
期中活動 (12 日間)	小学生、高校生を対象とした異文化交流授業 栄養不良児童への給食づくり コミュニティの家庭訪問と仕事の手伝い
事後学習 (第 14 回から 16 回) *授業時間外学習あり	活動のまとめ(個人) 活動のまとめ(チーム) 大学祭での活動報告会(2 回)

図表 3-1-7 「グローバルスタディⅡフィリピン/2015 夏セブ」のふりかえり一覧

	内容	備考
事前学習	事前準備のふりかえり 事前学習のふりかえり	出国までに e-ポートフォリオに記事投稿し印刷物を提出
期中活動	日々の活動のふりかえり	日々の活動終了後に作成し翌日提出
事後学習	活動のまとめ(個人) 活動のまとめ(チーム)	e-ポートフォリオに記事投稿し印刷物を提出 成果物(スライド)をデータで提出

図表 3-1-8 「グローバルスタディⅡ フィリピン/2015 夏セブ」の評価一覧

	内容	配点	
事前	事前準備・事前学習のふりかえり	個人	10%
	交流計画案（授業案・小学校/高等学校）	チーム	20%
期中	活動日誌	個人	20%
事後	活動まとめ（個人）	個人	20%
	活動まとめ（チーム）	チーム	30%

図表 3-1-9 ベンチマークレベルの自己評価の変化

事前・事後の自己評価の変化	社会的能動性 （人）	多様性理解 （人）
自己評価が上がった	4	3
自己評価が変化しなかった	9	11
自己評価が下がった	5	4

※グローバルスタディベンチマークチェックシートを利用

5. 課題および改善点

- ループリックを自己評価として用いた場合、その結果には偏りが見られる。
しかしながら、学生の成果物（活動日誌やレポート等）や他者に対する行動・態度の変化を教員の立場から継続的に観察してみると、全ての学生が何らかの気づきを得て、自己変容していることが分かる。
- 学生の自己評価にブレが生じるのは、汎用的な技能と態度特性を指標化したベンチマークの記述が抽象的なものであることに加えて、ベンチマーク達成を客観的に自己評価するには、自己を継続的に観察する他者の介在が必要であることを示唆するものである。
- 人間の成長は直線的なものではなく、成長と停滞を往還しながら時間をかけて自己に醸成されるものであれば、獲得できたとするベンチマークは達成したものではなく、獲得の手掛かりを得たに過ぎないことが推察される。
- 成長を可視化し実感できるための改善策として、学生の成長と停滞の往還を俯瞰でき、その変容の背景を教員との協働作業によって意味付けできる仕組みが有効であろうと思われる。
- 具体的には、自己内省的な日々の記録や成果物を内包したポートフォリオを活用し、それら文脈の解釈と自己の再定義を教員との対話を通して図っていくことである。
- 教員には負担が大きく力量も求められるが、教育の最適化は効率化・合理化の対極にあることを自覚したい。

淑徳大学

表現文化調査研究Ⅰ（3年前期ゼミ科目）

担当者：野村 浩子 実施時期：2016年4～7月

○授業の内容と方法（活動内容）

改正公職選挙法改正の施行により、2016年7月10日の参議院議員選挙で初めて18歳から投票できるようになることを受けて、編集表現を学ぶ野村ゼミにおいて「若者向けの選挙啓蒙冊子」の作成に取り組んだ。板橋区選挙管理委員会と連携してのPBLで、区内の高校、大学などに配布するA5版8ページの冊子を作成した。

以下のようなステップで、学生自ら考え、企画し、取材・執筆・編集を行った。

STEP1 問題意識の共有、課題の洗い出し

18歳から投票できるようになった。これについて、どう思うか？自分自身、選挙に関心があるか否か。それはなぜか。学生の間で徹底的に議論をした。その中から「若者が選挙に参加しても何も変わらない」「政治はむずかしくてわからない、自分には関係がないと思う」といった声上がり、そう思うのはなぜか、議論を重ねた。

STEP2 課題の解決策を考える

「若者が選挙に行かない、政治に関心がない」という課題を解決するには、どうしたらいいか、どのような情報を発信すればいいか、さらに議論を重ねた。若者が政治に参加しないことで、どのような社会になるか、未来図を描いてみた。

STEP3 編集案を固める

若者に向けて、どんな情報をどのように伝えれば、選挙に行こうと思うか。具体的な編集案を検討する。8ページの中に、どのような情報を盛り込むか、だれに取材をするか。全員が企画案を立てて持ち寄り、8ページに盛り込む情報を固めた。同時に、デザインの方角性を固めた。

STEP4 取材をする

若者向けの選挙啓蒙活動を行うNPO法人の代表者、また淑徳高校の高校3年生に取材を行った。取材依頼状の作成、質問項目の絞り込みにおいて、学生は情報を取捨選択する力を磨いた。また取材当日は、的確な質問をして必要な情報を引き出すインタビューの力を実践で磨いた。

STEP5 執筆・編集作業を行う

取材内容を踏まえて、編集構成案を練り直した。同時に、写真の選定も行い、デザイナーにデザインを発注する。並行して、執筆に取り組んだ。一人平均7回ほど書き直しを行い、分かりやすく説得力のある原稿を書く力をつけた。

STEP 6 デザインの修正依頼を行い、校正作業を行う

デザイン案に対して、修正の依頼をする。同時に、校正作業を行う。自らグラフィックソフト「インデザイン」を操作しながら、文字の修正を行った。

STEP 7 完成した冊子を板橋区前野町イオン店頭で行われた選挙イベントで配布

完成した冊子を選挙イベントで学生自ら配布した。手渡しをしながら、冊子の反応を確認することができた。また当日は、新聞社2社、ケーブルテレビからの取材を受けたことで、記者に対して体験を通して学んだことを端的に伝えるという貴重な経験を行うことができた。

○補足 冊子は、板橋区内のすべての高校、大学で配布された。また選挙イベントの様子、大学での冊子作成の取り組みは、読売新聞、産経新聞、東京新聞の首都圏版、日本経済新聞の全国版「18歳プラス」面で紹介された。ジェイコムのカابلテレビでも放映された。こうした反響からも、学生は達成感を高めたようだ。

○まとめ、今後の課題

「若者の政治参加」を深く掘り下げて考えることは、「課題発見・問題解決力」を身につける第一歩となった。実際に制作物を作る過程では、企画力、構想力、インタビューをする力、情報リテラシー、執筆力などを磨くことができた。今後は、これらの力を測る独自のルーブリック開発に取り組みたい。

また今回、若者向け選挙啓蒙冊子の作成というテーマ設定は教員が行ったが、今後は学生自らが課題を見出し、その解決策を考えるよう、自主的な学びと行動を促していきたい。



授業の様子

淑徳大学 学校ボランティア

1. 概要

教育学部は、平成 25 年度に開設した学部であり、平成 28 年度現在、4 年目を迎えている。本学部は、幼稚園教員、小学校教員、保育士を養成する学部であり、本学の教育理念である「実学教育」を中心に、教育者、保育者としての実践的指導力の向上を目標に掲げ、カリキュラムを作成している。

この中で、初等教育コースでは正課外活動として「学校ボランティア」の取り組みを行っており、実践的指導力の向上に努めている。本稿では、初等教育コースで実施されている「学校ボランティア」について報告する。

2. 授業の内容と方法（活動内容）

本学部の初等教育コースでは、1 年次～4 年次まで実際の学校現場で学ぶ「実学教育」の理念のもと、実践的指導力向上のためのカリキュラムを作成し、学生たちの学びにより強いインパクトを与える工夫をしている。大まかなカリキュラムの流れは、図表 3-1-10 に示したとおりである。全体のカリキュラムの中で、「学校ボランティア」は 1 年次～4 年次にかけて実施されている。

なお、学校ボランティアは、強制的なものではなく、学生の意思に基づいた取り組みであるが、週に 1 日ボランティアを行えるよう正課の時間割を組んでいる。例年、20 名～30 名前後の学生が学校ボランティアに参加している。

学校ボランティアで行われている主な活動は、「始業前・休み時間・放課後における遊び支援」、「登下校時の安全指導の補助」、「給食指導・清掃指導の支援」、「授業準備・片づけ補助」などである。

図表 3-1-10 実践的指導力向上のためのカリキュラム

	現場実習(単位認定)	長期間の学校インターンシップ(正課外活動)
1年次	フィールドスタディⅠ(必修) 学校での教育活動を学ぶ 子どもたちの実態を学ぶ	・夏季補習授業等のボランティア ・夏季宿題教室のボランティア ・地域子ども教室のボランティア ・教育委員会・学校の要請に基づくボランティア
2年次	フィールドスタディⅡ(選択) 特別支援教育のあり方を学ぶ 障害について学ぶ	学校ボランティア 学校ボランティアの目的 ・教員の仕事を ・授業の工夫、学級経営の工夫を学ぶ ・個に応じた指導のあり方を学ぶ ・自分の目指す教師像を明確にする ・学校、子どもたち、教員と触れ合う ・自分の将来を考える 等々
3年次	早期教育実習(必修) ※一定の基準を達成した学生は4年次ではなく、3年次に教育実習を行う	
4年次	教育実習(必修)	
		学校インターンシップ(対象者のみ)

3. 成績評価の方法(学修成果の評価)

学校ボランティアは、脇本(2015)の示唆している「経験学習モデル」を参考にふりかえりが行われている。このモデルは「具体的経験」、「内省的観察」、「抽象的概念化」、「能動の実験」の4つのプロセスを繰り返すサイクルをとおして、実践知を獲得していくモデルである。また、評価指標として、15個の内容についてどの程度向上したかを問うアンケートを行っている。

4. 授業の成果(活動の成果、ステークホルダの評価、予想していなかった学生への効果など)

学校ボランティアの成果については、学生へのアンケートの結果、「挨拶、言葉遣い、服装、他の人への接し方など、社会人として求められる基本的なマナーを身につけることができた」、「子どもたちの発達段階を考慮して、積極的に声をかけたり相談に乗ったりするなど、親しみを持った態度で接することができた」、「上司や同僚等(学校の先生方)の意見やアドバイスに耳を傾け、理解や協力を得て問題解決に取り組むことができた」といった内容について向上が見られた。

5. 課題および改善点

今後の課題としては、学校ボランティアを無理なく継続できる仕組みを作るために、大学・学校現場・行政との連携が必要であること、大学が教員養成のカリキュラムの中に学

校ボランティアのふりかえりの場を明確に位置づけ、学生の意識を高める必要があることなどが挙げられる。



学校ボランティアの様子

淑徳大学

①給食経営管理実習 A/B、②老年看護援助論Ⅱ

実施時期：①栄養学科 3 年次、②看護学科 3 年次

受講者数：①約 70 名（2 クラスに分ける）、②約 100 名

1. 授業の目的・目標

（身につける知識・能力等＝学修成果）

看護学科では看護師・保健師を、栄養学科では管理栄養士・栄養士の国家資格を得ることを目的としたカリキュラムであり、全ての学生が実習（教室外プログラム）での単位修得は必修であるため、本事業の中で新しく企画した教室外プログラムはない。そこで、この報告では、学内における能動的学修法について報告する。本学部では、FD 委員会が中心となり、教員間の授業公開・授業参観の取り組みの中で能動的学修法を用いている授業を提示し、能動的学修の手法の共有や検討を促進してきた。「思考力を高めるためのグループディスカッション」「模擬患者に対する技術演習や教育内容・方法の立案・実施」「知識定着のためミニテスト（クイズ式、クリッカー使用）」など、現在では全ての教員が全ての科目で何からの能動的学修法を取り入れている。ここでは給食経営管理実習と老年看護援助論Ⅱの取り組みについて報告する。

2. 授業の内容と方法（活動内容）

①給食経営管理実習 A/B

○授業内容

図表 3－1－1 1 授業内容と配当コマ数

1. 供食サービスに向けた事前学習（栄養計画、食事計画、食材購入計画、生産計画の作成、実施予定献立の試作）	4 コマ
2. 供食サービス 4 グループがそれぞれ〈栄養士〉〈計画・準備〉〈調査・記録〉〈調理〉に分かれて行う。	4 コマ
3. 前半の評価、後半の計画修正	1 コマ
4. 供食サービス 4 グループがそれぞれ〈栄養士〉〈計画・準備〉〈調査・記録〉〈調理〉に分かれて行う。	4 コマ
5. 総合評価会準備	1 コマ
6. 総合評価会	1 コマ

○方法

- ・学生を対象とした学生食堂を特定給食施設と想定し、100食以上の給食提供を実施する。
- ・実習計画（Plan）から実施（Do）、検証（Check）、改善（Act）に至るすべての過程を、学生自身の手で進め、自主的に取り組む。
- ・試食には、実習日に当たらない3年生のみでなく教職員も参加し、評価する。



給食経営管理実習 授業の様子

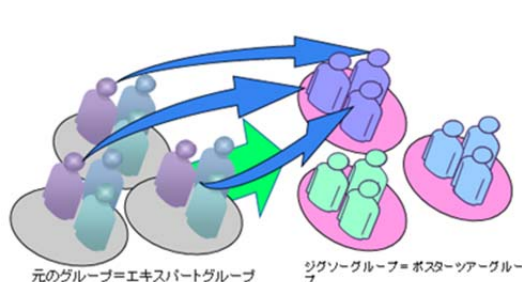
②老年看護援助論Ⅱ

○授業内容

図表 3-1-1-2 授業内容と配当コマ数

1.モデルプランの展開 (説明および think-pair-share)	2 コマ
2.実習施設に合わせた模擬事例の情報の整理・統合	事後学習
3.模擬事例に必要なケアの体験〔Student Assistant や DVD を用いた演習：口腔・義歯ケア、嚥下体操、食事介助〕	3 コマ
4.実習施設グループで模擬事例のケアプラン・行動計画・企画書の立案・シミュレーション・発表用のポスター作成	3 コマ
5.ポスターツアー：ジグソーグループで発表 1 人 15 分・ディスカッション 5 分	2 コマ

○方法



図表 3-1-1-3 ポスターツアーグループについて



老年看護援助論Ⅱ 授業の様子

3. 授業の成果（活動の成果、ステークホルダの評価、予想していなかった学生への効果など）

①給食経営管理実習 A/B

グループで計画・実施・検証・改善を継続して行うことにより、PDCA マネジメントサイクルの実際を習得すると共に、チームワーク・コミュニケーション・リーダーシップの重要性を学ぶことを意図している。学生は、給食運営では多くの人の力を借りることが必要であることや、管理栄養士には指導力が必要であることを学ぶ機会となっていた。また、試食している様子をみたり、試食した仲間や教職員からのアンケートを読んだりすることで、自身が作った給食への生の声を知ることが出来、多くの学生が「一番大変な授業であったが、一番やりがいのある授業である」と感じていた。

②老年看護援助論Ⅱ

本科目は、3年次の後期の実習前の演習科目である。実習施設に合わせた模擬事例を用いて実際にケア体験、ケアプラン、行動計画などを整理することにより、学生は「実習のイメージが湧いた」と発言していた。また、ジグソーで発表することにより、全ての学生が元のエキスパートグループで作成したポスターについて発表するため、「個々の発表があるため、皆が意欲的に参加できてよいと思った」「各グループの発表を聞くことができ、同じ事例でも発想の違いがあり勉強になった」など、能動的学修につながった。また、グループ学習では、4年次の学生に Student Assistant として参加してもらったことで、「先輩の体験からの言葉が響いた」など、教員ではなく身近な先輩のアドバイスが効果的であった。

淑徳大学

短期海外研修

実施時期：2 年次後期 受講者数：87 名（経営学科 39 人、経営観光学科 48 名（2015 年度実施））

1. 授業の目的・目標

（身につける知識・能力等＝学修成果）

経営学部の短期海外研修は、2 年次後期のみに履修可能な選択科目であり、研修の目標は、ビジネスのグローバル化に対応するために、海外の社会や文化を理解して社会常識を身につけ、また国際的企業・組織に通用する知識・スキルとは何かを学ぶことである。

事前学習→現地学習→事後学習という 3 ステップで構成され、9 月から翌年 2 月までの間に事前学習(8 回程度)を行い、現地学習を 2 年次最後の春休み(2 月下旬から 3 月上旬)に実施、帰国後に事後学習を 1 回行い、最終レポートを 3 月中に提出・評価を行う。現地学習は、シンガポール 4 泊 5 日で、現地の経済団体や日系企業のレクチャー、工場・観光施設の視察等を行うほか、自由視察時間を設けている。

2. 授業の内容と方法（活動内容）

学部の 2 学科(経営学科、観光経営学科)共通科目のため、担当教員は 2 学科から 1 名ずつを充てる。事前学習(現地学習で来訪するシンガポール歴史や現状、現地学習でレクチャー受講・視察対象企業・施設の概要等について解説)は、2 人で分担して行う。研修旅行運営者である旅行会社の協力のもと、現地学習の調整(企業探し・アポイントとり等)を行っている。



日本料理店の日本人経営者のレクチャーの様子

3. 成績評価の方法（学修成果の評価）

事前学習・事後学習の出席率、渡航必要書類の提出、事前学習課題・事後学習課題(レポート)の提出、現地での研修態度を評価の対象とし、現地学習不参加者、レポート未提出者には単位認定は行わない。

4. 授業の成果（活動の成果、ステークホルダの評価、予想していなかった学生への効果など）

学生から提出された最終レポートからは、自由視察時間において英会話力の弱さへの気づきが多くみられた。また、現地に進出した日本企業のレクチャーを聞くことにより、海外進出の目的や、現地事情を踏まえたビジネス展開を、最新事例と共に学ぶことができる。また、特に観光経営学科の学生は、日本にはない観光施設(地上 57 階のプール等)を体験したり、自分自身が「外国人」として他国に滞在することで、日本の観光産業・観光関係企業の在り方について再考する契機を得られる。

5. 課題および改善点

大学から旅費補助（旅費総額の 1/2、最大 10 万円）があるものの、自己負担が 12 万円程度、その他にも渡航前費用（パスポート取得費、保険代、空港までの交通費等）や現地費用（一部食事代、通信費、交通費、土産品代等）が必要なため、経済的理由から履修しない（できない）学生が見受けられる。

経営学部の卒業要件（実践科目の中の選択科目から 6 単位の履修が必要）を満たすためにも本科目を多くの学生に履修してほしいと考えるが、一方で履修者が多すぎると、現地学習に問題が生じる（航空座席やホテルの予約、現地レクチャー企業の受け入れ人数制限等）。

淑徳大学

Learning Assistant

1. 授業の目的・目標

(身につける知識・能力等＝学修成果)

2016 年度より淑徳大学経営学部では Learning Assistant (LA) 科目として「チームワークとリーダーシップ (前期)」、「コミュニケーション論 (後期)」を展開している。これらの講義は 1 学年もしくは 2 学年上の先輩学生 (LA) が教育のサポートとして学生教育に携わるものである。この講義をとおして受講学生の成長だけでなく、LA の成長も想定している。

2. 授業の内容と方法 (活動内容)

専門的なインプット部分を教員が担当し、グループワークや学習サポーターとして LA 学生が活動している。講義後には最短でも 90 分以上の反省会を欠かさず実施し、教員と LA が協力しながらプログラムを構築する体制である。

3. 成績評価の方法 (学修成果の評価)

課題取り組みへの意欲や貢献度、課題物の提出状況、その質、最終的なビジネスアイデアといった成果物の完成度をもとに受講学生の単位評価をしている。学生の成長については、2016 年度に開始したばかりの科目のため、定量的な評価材料はまだ十分に揃っていない。よって、以下では定性評価について目を見張るものについて言及する。



受講学生と LA 学生 8 人、担当教員 4 人

4. 授業の成果（活動の成果、ステークホルダの評価、予想していなかった学生への効果など）

LA 学生については、講義で学生の前に立って話す機会を通して自分に自信が付き、どのようにすれば人が動いてくれるのかといった能力を着実に習得していることが見られる。4 月から 10 月の 6 か月といった短い期間でも目を見張る成長が見られるのは、毎週講義後に教員・学生が共に集まってじっくりと改善点を洗い出し、次への取り組みに活かす労力が成果を出しているものと考えられる。

受講学生についても、身近な先輩が成長している姿を見て、自分自身を成長させようとするモチベーションが高まっている様子が見られる。受講学生から実際に「自分自身を成長させたい」といった声が上がってきているのは特筆すべき点であると考えている。

5. 課題および改善点

上記学修成果がある一方で、学生のモチベーションにムラがあることは否めない。どの層の学生をメインのターゲットにして講義展開していくのかは難しいところである。

淑徳大学

ケーススタディおよびワークショップ（ちばでもプロジェクト）

担当者：矢尾板 俊平

実施時期：2015 年 4 月～2016 年 3 月 受講者数：20 人

1. 授業の目的・目標

（身につける知識・能力等＝学修成果）

淑徳大学コミュニティ政策学部の実践科目のうち、「ケーススタディ」と「ワークショップ」の科目概要は、以下のように設定されている。

① ケーススタディ

コミュニティ形成の実践現場における諸課題に関する具体的な事例を取り上げて考察することにより、その背後にある原理や法則性などを究明することで、一般的な法則や理論を発見するための方法について学習するとともに、実践事例に関する文献購読や資料分析、実地観察などにより、基礎的な研究意識の涵養と研究能力の養成に加えて、発表や討論などを繰り返し行うことにより、自己の考えを展開することについて学習する。

② ワークショップ

講義科目において習得した知識の有効性を実践的に学習させることを目的として、ワークショップⅠ、ワークショップⅡをとおして、一貫した体験学習による指導体制をとるものであり、コミュニティ政策では、地域の合意形成が重視されることから、参加者同士の体験共有、意見表出、創造表現、意見集約などにより、地域における課題を共有で認識するとともに、地域の合意形成を図るための有効な手段の一つであるワークショップの手法について学習する。

ケーススタディは 3 年次に配当される実践科目であり、授業の到達目標は、実践事例研究の方法に関する知識と能力を修得し、基礎的な研究意識の涵養と研究能力を修得することと言える。またワークショップは、合意形成を図るための手法として、ワークショップの手法についての知識や能力を身に付けるとともに、基本的な問題解決の方法を修得することが到達目標として設定されることが考えられる。

2. 授業の内容と方法（活動内容）

「ちばでもプロジェクト」では、千葉県選挙管理委員会、千葉市選挙管理委員会等と連携し、若年層の投票率の向上を課題とした事例研究とサービスラーニング学習を行った。3 年生のケーススタディでは、朝日新聞千葉総局と連携し、2015 年 8 月から 11 月にかけて、アンケート調査（「若者の政治参加に関するアンケート調査」）を実施し、若年層の政治参加、投票行動の分析を行った。アンケートでは、千葉県、東京都、埼玉県、神奈川県などの 16 歳から 29 歳までの若者、約 1000 名から回答を得た。また、アンケートの調査結果、さらには事例研究として、スウェーデンの若者参画政策の調査を行い、その成果を「若年

世代の投票率向上には何が必要か・若者の政治参加意識調査をベースとしながら考える有権者としてのあり方」に取りまとめ、第18回公共選択学生の集いにおいて発表した。

4年生のワークショップでは、3年生が実施したアンケート調査等の結果も踏まえながら、千葉県選挙管理委員会と連携し、選挙の啓発活動や模擬投票やワールドカフェ等を通じた「主権者教育」の取り組みを進めた。

2015年4月の統一地方選挙時には、政策比較サイトを作成するために、千葉市議会議員へのインタビューを行い、動画インタビューをWEB上で公開した。また候補者による公開討論会の開催、駅前での投票啓発活動も行った。さらに、選挙戦のフィールドワークを行った。

2015年9月以降は、千葉県選挙管理委員会と連携して、高校での「主権者教育」の取り組みとして、大学生が候補者役となり、また選挙事務担当者となり、模擬投票を行った。さらには、「主権者教育」用の教材づくりなどを進めた。



活動の様子

3. 成績評価の方法（学修成果の評価）

授業の到達目標を達成しているかどうかを確認しながら、成績評価を行っている。具体的には、グループ論文の内容やサービスマーケティング活動の成果を踏まえて、ルーブリック等も活用しながら評価を行っている。また、論文作成への貢献、サービスマーケティング活動への貢献も、成績評価として反映される。

4. 授業の成果（活動の成果、ステークホルダの評価、予想していなかった学生への効果など）

授業の成果としては、大きくは 2 つに分けられる。ひとつは学生個人の成長にいかに関与しているのか、もうひとつは社会的なインパクトである。

学生個人の成長については、3 年生においてはグループ論文の内容、4 年生においてはサービスマーケティング活動の取り組みの成果から、基礎的な研究意識の涵養と研究能力を修得することができ、また課題解決力を高めたことが成果として挙げられる。また、コミュニケーション力も大きく高まっていると考えられる。

社会的なインパクトとしては、本プロジェクトの取り組みは、NHK「おはよう日本」で取り上げられたほか、朝日新聞、読売新聞、産経新聞、東京新聞、千葉日報の各紙で大きく取り上げられた。

また、学生たちの提案により、2016 年 2 月の千葉市議会において、淑徳大学千葉キャンパスに期日前投票所を設置するための予算が承認され、2016 年 7 月の参議院選挙において、千葉県内初の大学キャンパス内の期日前投票所が設置されることとなった（政令指定都市としても、大学キャンパス内で設置が決定されたのは初めてのケースとなる）。

5. 課題および改善点

本取組は、2013 年度から始められたプロジェクトである。2013 年に、公職選挙法が改正され、インターネットによる選挙運動が解禁となった。そこで政策比較サイトの作成が行われた。2014 年度は、2014 年 12 月に衆議院総選挙が行われたことから、政策比較サイトを動画インタビューのサイトに改善した。さらに千葉県選挙管理委員会と連携して、ワークショップの開催、小学校での模擬投票を実施した。こうした実績を踏まえて、2015 年度も千葉県選挙管理委員会、千葉市選挙管理委員会と連携して取り組みを進めた。

本プロジェクトの実績により、大学キャンパス内の期日前投票所の設置などが決まっている。

現在、「18 歳選挙権」が注目されている。重要なのは、18 歳になるまでに、「未来を主体的に選択する力」を身に付けることである。そのためには、子どものころから、自分で「選択する」機会を体験的に持つことが大切だと考えられる。

そこで、2016 年度は、「選挙」だけではなく、「子ども・若者の社会参画」という視点から、子どもや若者の意見を、どのように政策プロセスの中で反映させていくかという課題

も視野に入れて、取り組みを発展させていきたいと考えている。

すでに、その取組としては、千葉市とも協働で検討を進めており、次年度以降の取り組みを進めていく予定である。

淑徳大学

保健医療と福祉の連携Ⅰ

実施時期：4 年次 受講者数：約 250 名

1. 概要

総合福祉学部には社会福祉学科、教育福祉学科、実践心理学科があり、学士課程教育を中核としながらも、各々が免許資格取得や進学等に備えた独自のカリキュラムを構築している。社会福祉学科および教育福祉学科においては、免許資格取得のための実習教育が特色をなし、実習教育の充実と学修成果の可視化が優先課題となってきた。また、実践心理学科においては、学修成果の可視化として、基礎教育および専門教育の 4 年次到達度評価の検討や、総合課題研究の発表等を中心に改善が図られている。

その中から、この報告では社会福祉学科 4 年生を対象とする「保健医療と福祉の連携Ⅰ」における取組と、教育福祉学科における実習共通ルーブリックの作成を取り上げる。

2. 授業の内容と成果

この授業では、社会福祉士や精神保健福祉士を目指す社会福祉学科の 4 年生と看護師や保健師を目指す看護学科の 4 年生（学生約 250 名）と両学科の教員 10 名が 5 人～10 人程度の混合グループに分かれて、事例検討を行っている。平成 27 年度には「高齢者夫婦世帯の退院支援」の事例について取り上げ、グループディスカッションと全体発表を行った。学部を越えた学生たちが「チームケア」について体験的に学べる機会となり、さまざまな職種を目指す学生が集まる淑徳大学ならではの取り組みとすることができた。

学生からは、「視点の違いはあるが“クライアントのために”という思いは共通していた」「多職種で協働していくためには、まず互いの考えを否定せずに聞き入れていく姿勢が求められており、互いを尊重し合うことが必要だと学んだ」等の感想が寄せられ、学生のうちから実践感覚を疑似体験できたことで、それぞれの国家試験受験への動機づけが強化された様子が見られた。今後も淑徳大学の特性を加味した豊かな教育を提供できるように改善に取り組んでいきたい。



グループディスカッションの様子



全体発表（グループ報告）の様子

3. 教育福祉学科・社会福祉学科における実習共通ルーブリックの開発について

教育福祉学科では保育士資格および幼稚園教諭、小学校教諭、中学校・高等学校教諭(保健体育)、特別支援学校教諭、養護教諭の一種免許状が、また社会福祉学科では中学校教諭(社会)、高等学校教諭(公民)の一種免許状が取得できる。両学科では、実習生としての準備状況を自らふりかえり、主体的に学びを深めるための共通ルーブリックの開発に準備期間を経て平成 27 年度から着手した。各課程の代表教員によって構成されるワーキンググループを立ち上げ、実習を通じてどのような学びを学生に深めていって欲しいかをテーマに 3 回にわたる検討を重ね、試案として取りまとめた。この試案については、平成 28 年度の実習から試験的に運用を始めている。試験的な運用として位置付けたのは、実際の活用状況や免許資格の多様性をより踏まえたルーブリックに練り上げるためであり、また学生や非常勤講師の先生方、また可能であれば現場の先生方からの声も反映していければと考えたためである。大学間連携事業も今年度が最終年度となる。これからの検討を通じて、学生にわかりやすく使いやすいルーブリックになるよう改善が図られることを期待している。

図表 3－1－1 4 保育・教育実習共通ルーブリック試案

保育・教育実習共通ルーブリック試案(施設実習を除く)

平成28年4月7日

※太枠は全免資課程共通。大項目の4のみ、保幼課程と小中高特養課程に分ける。

	大項目	中項目	レベル3	レベル2	レベル1
1	保育者・教師として求められる使命感・責任感・教育的愛情等	実習に取り組む態度	謙虚な姿勢を保ちながら積極的に活動に参加し、自ら指導・助言を求めながら、主体的に学ぶことができる。	謙虚な姿勢を保ちながら活動に参加し、指導・助言をよく理解するとともに、課題の改善に取り組むことができる。	課題を見いだし、積極的に学ぼうとする意欲がある。
		保育者・教師としての姿勢	保育者・教師としての使命・責任を理解し、その責務を果たすべく、子どもに寄り添い、愛情をもって積極的に関わるができる。	保育者・教師としての使命・責任についてあらためて考えるとともに、子どもに寄り添い、愛情をもって関わるができる。	保育者・教師としての使命・責任について学び、子どもに寄り添い、愛情をもって関わるができる。
2	社会性や対人関係能力	保育者・教師として必要な社会性	あいさつ、身だしなみ、言葉遣い、電話の対応など、保育者・教師に必要なTPOIに合わせた振る舞いを身に付けており、柔軟に対応できる。	あいさつ、身だしなみ、言葉遣い、電話の対応など、保育者・教師に必要なTPOIに合わせた基本的な対応が一通りはできる。	あいさつ、身だしなみ、言葉遣い、電話の対応など、保育者・教師としてTPOIに合った振る舞いがあることを知っている。
		社会人としてのコミュニケーション能力	大学および実習先の指導教諭や他の教職員に、明朗かつ節度ある態度で接するとともに、適切に報告・連絡・相談をし、よりよい人間関係の中で、実習を円滑に進めることができる。	大学および実習先の指導教諭や他の教職員に、明朗かつ節度をもって接するとともに、報告・連絡をするだけでなく、必要なときには相談をすることができる。	大学および実習先の指導教諭や他の教職員に対して、明るく笑顔で接するだけでなく、最低限の報告や連絡を怠りなくできる。
		保護者・地域との連携	園や学校が地域ぐるみで子育てをしていることの認識を持ち、保育者・教師が、保護者や地域住民、その他の医療・福祉を含む関係機関と強く連携していることについて理解を深めることができる。	園や学校において、保育者・教師が保護者や地域住民、関係機関とどのように連絡を取り、連携をはかっているのか関心を持つことができる。	園や学校が、保護者や地域とどのように連携しているのか関心を持つことができる。
3	子どもへの理解および配慮や関わり	子ども理解	必要とされる心理・発達の基礎知識にもとづいて一人ひとりの子どもの特性や状況を理解し、子ども理解に応じた支援を行うことができる。	必要とされる心理・発達の基礎知識にもとづいて、子どもの特性や状況の理解に努めている。	必要とされる心理・発達の基礎知識にもとづいて、子どもの言動を理解しようと努めることができる。
		子どもへの関わり方	保育者・教師として明るく温かみのある態度で子どもに接するとともに、場面に応じた指導を適切に行うことで、子どもとの信頼関係を築くことができる。	保育者・教師として適切な言葉遣いで明るく接することができ、子どもとの信頼関係が築けるよう努めている。	保育者・教師として適切な言葉遣いで接することができる。
		倫理的配慮	子どもの人権やジェンダーへの配慮、また特別な支援を必要とする子どもへの「合理的配慮」などを踏まえ、一人ひとりの子どもと保育者・教師として必要な倫理的配慮をもった関わり方ができる。	子どもの人権やジェンダーへの配慮、また特別な支援を必要とする子どもへの「合理的配慮」などについて知り、保育者・教師として必要な倫理的配慮に努めることができる。	一人ひとりの子どもを一人の人間として尊重し、保育や教育に必要な健康・衛生・安全・環境整備等への基本的配慮を行うことができる。
		集団の把握・経営	規範づくりや環境構成、清掃指導や給食指導等、集団を経営していく上での留意点や方法について理解し、明るく活発で心の結びつきの強い子ども集団となるような実践ができる。	規範づくりや環境構成、清掃指導や給食指導等、集団を経営していく上での留意点や方法について理解を深め、心の結びつきの強い子ども集団になるよう努力している。	規範づくりや環境構成、清掃指導や給食指導等、学習する上での集団の効果や、集団を経営していく上での留意点や方法があることを知っている。
4	保育実践力／授業実践力	(保幼)保育観察	保育のねらいを理解して、課題を持って保育を観察でき、目の前の保育者と子どもの関わり合いについて学ぶことができる。	保育者や子どもの様子を保育のねらいとなる観点を踏まえて観察し、その記録を事後の学びに生かすことができる。	保育者や子どもの様子を観察し、事後の学びのために記録を残すことができる。
		(小中高特養)授業参観	自分が授業者であったとしたらどうするかと考えながら参観し、目の前の授業者と子どもの様子に関連させて、さらに努力すべき自己の課題を自覚することができる。	授業者や子どもの様子を観点を絞って観察する中で、参考になる点に多く気づき、その記録を事後の学びに生かすことができる。	授業者や子どもの様子を観察し、授業の流れや主な発言等、事後の学びのために必要なことを記録することができる。
		(保幼)各領域等に関する知識・技能	言語・音楽・造形・身体的な表現を子どもとともに楽しむことができる。	言語・音楽・造形・身体的な表現を取り入れた活動を子どもの前で一通り行うことができる。	言語・音楽・造形・身体的な表現を取り入れた活動を子どもの前で部分的に行うことができる。
		(小中高特養)各教科・領域等に関する知識・技能	各教科・領域等における専門性を生かし、基本的な知識・技能はちろん発展的な内容についても、子どもの実態に合わせて柔軟に展開することができる。	各教科・領域等における単元項目や内容を理解し、基本的な知識・技能を実践において確実に展開することができる。	各教科・領域等における基本的な知識・技能が身に付いている。
		(保幼)幼稚園教育要領、保育所保育指針の理解と保育内容の研究	幼稚園教育要領や保育所保育指針を踏まえた保育内容の研究方法を身に付けるとともに、子どもの実態に即した保育内容・教材を開発することができる。	幼稚園教育要領、保育所保育指針の各領域のねらいや内容を理解し、子どもの実態に合わせた保育内容を組み立てる方法を身に付けている。	幼稚園教育要領、保育所保育指針の各領域のねらいや内容について理解している。
		(小中高特養)学習指導要領の理解と教材研究	学習指導要領の目標や内容を踏まえ、多様な授業形態・授業内容を展開できるよりよい授業実践のための教材研究法を身に付け、子どもの実態に即した教材開発をすることができる。	学習指導要領の目標や内容を踏まえた教材研究を行い、指導要領や多様な教材に対する理解を深め、実践に取り入れることができる。	学習指導要領の目標や内容について理解するとともに、教材研究の意義や必要性について理解している。
		(保幼)指導計画(指導案)の作成	子どもの実態に即した保育を主体的に構想し、子どもの活動が具体的にみえる指導案を作成することができる。	保育者の指導を受けながら、具体的に保育を構想し、指導案を作成することができる。	保育の計画の意味を理解し、指導案作成の手順と方法について理解している。
		(小中高特養)学習指導案の作成	子どもや学級の実態に応じた教材研究に力を入れ、学習活動や子どもの動き、反応等を具体的に予想した詳細な内容の学習指導案を作成することができる。	教材研究に力を入れ、授業の流れについて細かく内容が記述された指導案を作成することができる。	必要とされる内容について記述し、指定された様式で指導案を作成することができる。
		(保幼)保育実践(保育展開力)	幼稚園や保育所の子どもの実態に即した環境構成や援助をすることができる。	保育を行う上での基本的な環境構成や援助について理解し、それを実践することができる。	環境構成と援助の基本について理解している。
		(小中高特養)授業実践	各領域・教科等の特性や内容に応じ、授業を行う上での基本的な指導技術が身に付いてるだけでなく、アクティブラーニングを取り入れるなど、子どもの主体性や学びたいという意欲を重視した授業展開ができる。	授業の進め方、話し方、板書などの基本的な指導技術を身に付けるとともに、各領域・教科等の特性や内容に応じた授業展開ができる。	各領域・教科等の特性や内容に応じ、授業展開ができる。

淑徳大学

歴史調査実習Ⅰ・Ⅱ（2年生）

担当者：人文学部歴史学科 森田喜久男・三宅俊彦・遠藤ゆり子・田中洋平

実施時期：2015年4月～1月

1. 授業の目的・目標

（身につける知識・能力等＝学修成果）

歴史学科では、史料調査や史跡踏査などのフィールドワークを学科教育の特徴としている。歴史の現場を歩くこと、それ自体は他大学の歴史学科でも行われているが、本学の歴史学科の場合は、原則として金曜日はフィールドワークのために、教室内での授業をなるべく入れないように配慮を行っている。

歴史調査実習では教室における講義や演習だけではなく、古文書や考古資料などが保管されている公文書館や博物館、史跡、遺跡などに実際に足を運び、歴史の現場を五感で体験させ、主体的な学びを促進することを目指している。現地を歩くことによって得た情報を史料や文献の読解にフィードバックさせること。これが、専門教育科目群の中で歴史調査実習の果たすべき役割である。

2. 授業の内容と方法（活動内容）

この授業は4名の教員のオムニバス形式である。2015年度のフィールドワークの対象地は、板橋区立郷土資料館、埼玉県文書館、横浜ユーラシア文化館、丸の内ビジネス街であった。

授業の形態としては、学外におけるフィールドワークを実施するに際して、1回あたり90分という形は実態にあわないので、1回あたりの時間数を通常の時間割とは異なる時間帯に180分とした。ただし、フィールドワークのオリエンテーションを兼ねた事前の講義については90分の中で実施した。

フィールドワークを終えた後は、グループに分かれて調査の成果をまとめ、お互いに発表しあう。

授業での討論は基本的にはグループ発表にもとづくディスカッションの形式であり、関西国際大学より提供されたコモンルーブリックをカスタマイズする形で歴史学科独自のルーブリックを作成し、学生間でお互いに評価しあう形をとった。

3. 成績評価の方法（学修成果の評価）

評価方法は単なる筆記試験だけでは測定し得ない。具体的な評価基準は、授業への参加状況（報告・討論など）30%、提出物（各課題）30%、レポート試験40%である。

4. 授業の成果（活動の成果、ステークホルダの評価、予想していなかった学生への効果など）

高等学校までの日本史や世界史は、いわゆる「暗記科目」として認識されている。しかし、大学で学ぶ歴史学とは、昔の人が書き遺した史料を読み解き、自分自身の手で歴史像を構築しなければならない。そのためには、漢文やくずし字を読解する必要があるが、日本史が好きで歴史学科に進学してきた学生の中には、大河ドラマや小説、ゲーム、アニメなどを通して歴史に興味を持つようになった者が多い。

つまり、学生達は歴史家であれ、小説家であれ、自分自身ではなく誰かによって創り出された歴史に親しんできているのである。従って、自分自身がイメージしていた歴史と大学で学ぶ歴史学とのギャップに多くの学生は悩むことになる。歴史調査実習は、そのギャップを解消するために効果を発揮する科目であり、歴史調査実習を終えた学生達は、自分達の手で新たな歴史像を構築する第一歩を体験できたと思われる。



授業の様子

図表 3 - 1 - 1 5 人文学部歴史学科ルーブリック

人文学部歴史学科 ルーブリック(歴史課題研究・歴史専門演習 プレゼンテーション用)

発表者氏名:

評価者氏名:

学籍番号:

	3	2	1	0
論点の明確さ	論点が明確で、主張が整理されている。 最も言いたいことがはっきりしており、聴衆の印象に残る。	論点がある程度明確で、主張したい内容を整理する努力がされている。 最も言いたいことがある程度伝わるが、改善すべき点がある。	論点に分かりにくく、主張したい内容が十分に整理されていない。 言いたいことがわかりにくく、あまり伝わってこない。	論点が不明瞭であり、主張したい内容が整理されていない。 言いたいことが全く伝わってこない。
論理構成と展開	結論に至るまでの基本構成(序論、本論、結論)がしっかりしている。 論理的に一貫しており理解しやすく、内容に説得力がある。	結論に至るまでの基本構成(序論、本論、結論)に基づいてはいるが改善が必要である。 論理的一貫性を意識しているが改善の余地があり、内容も説得力がやや弱い。	結論に至るまでの基本構成(序論、本論、結論)が明確でなく改善の必要がある。 論理が整理できておらず、内容も分かりにくい。	結論に至る基本構成をたどることができず、なぜその結論に至るのか示されていない。 論理的ではなく、内容も理解できない。
資料(図表、統計、文献引用)の利用	立論に必要な資料(説明、事例、図表、統計、類推)が適切に示され、複数の情報源(本、論文、web など)から適切に選択して正しく引用している。	立論に必要な資料(説明、事例、図表、統計、類推)を用いているが、情報源(本、論文、web など)の選択・引用に改善が必要である。	立論に必要な資料(説明、事例、図表、統計、類推)を用いているが、理解するのにあまり役立っていない。 情報源(本、論文、web など)の選択が適切ではない。	立論に必要な資料を用いていない。 引用の提示がなされていない。
プレゼンテーション技術 (音声表現)	言葉の選択が適切であり、声の大きさ、高さ、明瞭さ、スピード、間の取り方が適切である。 聞き手を意識し、分かりやすく効果的な技術を用いている。	言葉の選択、声の大きさ、高さ、明瞭さ、スピード、間の取り方の一部に改善すべき点がある。 聞き手を意識する努力がされている。	言葉の選択に誤りがあり、声の大きさ、高さ、明瞭さ、スピード、間の取り方に問題がある。 聞き手への配慮が見られない。	言葉の選択に誤りが多く、音声表現の技術を意識的に使えていない。 声が聞き取りにくく、終始一本調子である。
プレゼンテーション技術 (非音声表現)	聞き手の反応を確認しながら目配りや身振り、姿勢などの効果的な身のこなしを用いている。 資料やノートに目を向けるよりも、聞き手に多く視線を向けている。 服装も適切である。	聞き手に対する目配りや身振り、姿勢などを効果的に用いる努力をしている。 資料やノートに目を向けているが、聞き手に視線を向けながら話している。 場に合った服装。	聞き手に対する目配りや身振り、姿勢、服装などに改善すべき点がある。 資料やノートに目を落としながら話す場面が目立つ。	聞き手をまったく見ておらず、非音声表現がまったく活用されていない。 第三者にわかりにくい発言や態度に終始している。 服装に違和感がある。

自由記述:

北陸学院大学

アクティブ・イングリッシュ A

担当者：米田 佐紀子

実施時期：2016 年 9 月 12 日～9 月 15 日 受講者数：11 人

1. 授業の目的・目標

(身につける知識・能力等＝学修成果)

1.1 位置づけと科目概要

本科目は全学共通科目の言語教育科目に位置付けられている。単位数は1単位の前期集中科目である。2016 年度の新カリキュラムで新設された選択科目で、卒業要件単位に読み込まれる。

概要は次のとおりである。本授業では、まず英語に浸ることで自分のこれまでの学びが現実のものであることを認識し、その中から伝えたいことを探し、まとめ、最終的に伝えたいことを効果的に述べることができるプレゼンテーションスキルを身に付ける。構成は2部構成（学内学外での学び）になっている。事前授業では英語でのプレゼンテーションに必要な知識・技能を学び、British Hills（以下、BH とする）では英語漬けの生活を送る中で体験的学びをしつつ、プレゼンテーションの仕上げ・発表を行う。事後に報告会と報告書を作成する。

1.2 授業のねらい

授業のねらいは、以下のとおりである。

- ①自分の言いたいことを効果的に述べるようになる。
- ②英語によるプレゼンテーションスキルを身に付ける。
- ③英語がコミュニケーションのツールである体験を積み重要性に気付く。
- ④英語運用能力を現在のレベルよりも向上させる。
- ⑤異文化・異言語間のコミュニケーションとはどのようなものかを知る。
- ⑥異文化・異言語の壁を越えるためのスキルを身に付ける。
- ⑦異文化コミュニケーションの楽しさを体験的に学び楽しさを知る。

1.3 参加について：対象・履修資格・学力・履修理由

参加対象は全学年（大学1～4年生、短期大学部1～2年生）である。授業のねらいが国内に居ながらにして、英語に浸る体験をすることであり、希望する学生は原則誰でも体験できるよう、履修条件は特に設定されていない。集団生活上支障があるとみなされた場合等は履修を認めない、あるいは中止するという事をシラバスに明記している。

2016 年度は幼児児童教育学科1年生5名、4年生1名、短期大学部コミュニティ文化学科1年生5名の合計11名の参加であった。英語力は、履修者の入学時基礎学力テスト結果等

から、CEFR の A1～B2+を目指す混合クラスであった。

履修希望理由について、オリエンテーション時に自由記述式質問紙を用いて学生に書いてもらった。「外国に行かなくても異文化に触れる機会があったので参加しようと思った」「イギリス文化に興味がある」「中世英国の生活が体験できる」「建物がみたい」「椅子に座りたい」「英語を学んでみたい」「留学してみたいけど海外はまだ怖い」「英語を使って話す喜びを感じたい」など、英語と文化に対する興味が強いことがわかった。また「英国の食事マナーを学びたい」「ダンス楽しみ」などが多く見られ、体験的学びに意欲的であることが示された。ここから、履修動機に関するキーワードは「イギリス文化・体験・英語コミュニケーション・環境」であると考えられる。

上記からわかるようにプレゼンテーションができるようになりたという履修理由は見られなかった。実際授業を開始してみると、パワーポイントを使用したプレゼンが当然だと教員は考えていたため、参加者は全員パソコンを所持していると教員は予想していた。しかし、パソコンを持っている人数は2名、学外研修までに購入し持参した者は4名にとどまり、英語のスキルと併せ持つべき ICT の環境およびスキルが課題となった。

2. 授業の内容と方法（活動内容）

2.1 学習内容

科目担当教員（単位認定者）は人間総合学部教授の米田佐紀子と短期大学部助教のランキート・クリスタルであった。当初は事前事後および学外研修のすべてを担当する予定であったが、同時に行われるアクティブ・イングリッシュ B の参加人数が想定より増えたため、ランキートは B の引率に急きょ加わることになった。そのため、事前授業と事後指導、および評価にのみ加わった。事前授業は両者で相談しつつ、できるだけ英語で行った。

日程であるが、図表 3-1-16 のように全体予定を組み、4月にオリエンテーションおよび単位登録を行った。その後、人数確定日の6月15日以降から授業をするという学内申し合わせに従い、3回の事前授業を行った。本授業のねらいは模擬留学でもあったので、自分達で安全性を確保しつつ価格や方法を調べて旅行計画を立てることも特徴の一つであった。そのため、実際に動き出すと様々な事柄への対応が必要になり、予定した時間だけでは指導内容をカバーしきれないなどの諸事情から、追加の指導時間が必要となった。また夏休みを挟んだこともあり、連絡には電子メールを多く用いた。ここでも PC がなく、エクセルやワード、パワーポイントのファイルが開けない、使い方が分からない、添付ができないというスキルの壁にぶつかった。

学内授業（事前・事後学習）に加えて、British Hills（〒962-0622 福島県岩瀬郡天栄村田良尾芝草1-8）において、2016年9月12日～9月15日に研修を行った。BHは神田外語学院が経営する研修施設である。福島県に位置し、すべてが中世のイギリスを再現しているので、部屋は暗くテレビもなく、食堂もハリーポッターの世界を思わせる施設になっている。研修内容は英語教育で有名な上智大学の吉田研作氏の助言を得て研修を実施

している。教師はすべて研修を受け、教材はテーマに沿って揃えられており、小学生から大学生・企業研修にまで対応できるようになっている。1つのテーマで1回の授業という形式になっており、通常教師たちは参加者に「体験」させることを主眼としている。アクティブラーニングの手法は、教師も学ぶ点があった。

2.2 研修先における活動

学生のプレゼンを最終評価してほしいとの本学の要望は BH にとっては「特注」であった。教務主任の A 氏は時間をかけて授業のねらいと BH の特性を融合させ、すべての授業を学生の希望したテーマと関わるように変更してくださり、配慮と熱意、プロ意識を感じた。学生たちは Active learning を楽しみ、意欲的に参加していた。

毎日書かせた Learning Journal (100-150words) の内容は肯定的であり、英語の語彙選択・文法・一貫性等には課題があるが、余白まではみ出して書いている学生が多かった。授業の多くは体験型で、様々な工夫を凝らした授業であった。学生たちは、英語力の差を感じさせず、積極的に参加していた。それとは対照的に、プレゼンテーションでは英作文に苦勞していた。初回のプレゼンテーションで期待以上だったと褒められたのに、返却された原稿は赤字の修正が多く、「言いたいことがわからない」と書かれた学生は落ち込んでいた。ウェブ上の翻訳機や演技だけでは良いプレゼンテーションにならないことを知ったようである。講師から暗記するように言われ、発表日前夜は、宿泊棟のラウンジに集まり、全グループが必死に努力していた。どうしても解決できなくなった班については、引率教員に応援を求めきたため、学生指導に当たった。

最終発表では学生投票ではパフォーマンス中心のグループが1位に選ばれ、教師からは英語力や効果的なスライドの使い方をした他のグループが選ばれるなど評価の視点の違いが見られ、興味深かった。

11名のうち授業外アクティビティの English Adventure をなしえたのは5名だったが、英語で買い物をしたりスタッフに話しかけたりし、英語の使用を楽しんでいた。また、研修先に来ていた小学生や中学生が授業外でも英語でコミュニケーションを使用する姿を見て、自分たちの英語学習に対する甘さに気づいたというコメントがあった。意識の高い研修生と触れ合うことで、新たな発見が生まれるという想定外の効果があったようである。

図表 3 - 1 - 1 6 日程

事前学習(学内)	9 月 12 日	9 月 13 日	9 月 14 日	9 月 15 日	事後学習(学内)
4 月第 1 回目 オリエンテーション (希望者は必ず参加)	14.40 東北新幹線 新白河駅集合	Breakfast	Breakfast	Breakfast	まとめレポート提出(しおり作成) 学内発表
				Check Out Before 8.45	
		9.00-10.30 Interview Orienteering*	9.00-10.30 Presentation 1	9.00-10.30 Presentation 3	
第 2 回 6 月半ば以降 クラスルール等		11.00-12.30 Travel in UK	11.00-12.30 Culture & Manners	11.00-12.30 Presentation 4	
第 3 回 BH やイギリス文化 について調べる。 英語表現を学ぶ。	14.45 シャトルバス出発	Lunch	Lunch	Lunch	Depart from BH 新白河駅解散 (各自帰宅)
		14.00-15.30 World of Food	14.00-15.30 Dance*		
	15.30 Check in & Orientation -Transfer to Rooms-	16.00-17.30 British Wedding	16.00-17.30 Presentation 2		
第 4 回 プレゼン準備 福島への旅行について。	Dinner	Dinner	Dinner		
	Free Time Activities Pool - 21.30 Gym - 22.00	Free Time Activities Pool - 21.30 Gym - 22.00	Free Time Activities Pool - 21.30 Gym - 22.00		

*悪天候だったので、Interview Orienteering は British Board Game に変更された。

*BH Adventure という自由時間にいつでも英語体験ができるスタンプラリーを自由時間に活用すること。概要として、5つのミッション(① 8名のスタッフ・講師に質問をする、② 英語の本を読んで質問に答える、③ 写真のある場所に行って質問に答える、④ 館内にあるポスターの画像をスマホ・タブレットで読み取り、クイズに答える、⑤ ペッパーくん質問をする)をこなし、2つスタンプを集めて(巻末ワークシート使用)ショップへ行くと商品がもらえる。

*19:00~19:30 は Tuck Shop というお店で BH ポンドを使用して買い物ができる。3 晩とも本学学生のために開店をしてもらった。

3. 学生による評価

学生たちに BH における授業について質問紙調査を行った。調査実施目的は本授業の取組が学生にどのように捉えられたかを確認することである。質問項目は BH が引率教員に実施した「研修団体実施後アンケート」を参考に筆者が改編した。

3.1 調査

実施時期：2016 年 10 月

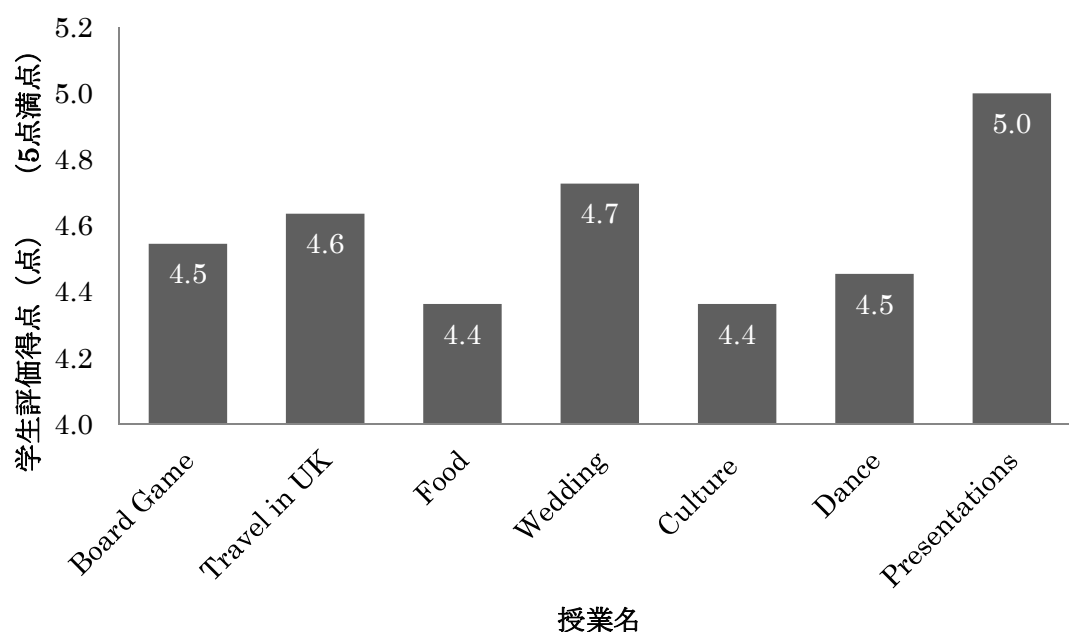
参加者：人間総合学部幼児児童教育学科 1 年生 5 名、同 4 年生 1 名、短期大学部コミュニティ文化学科 1 年生 5 名 合計 11 名

実施方法：BH の授業および施設やスタッフ等について、5 段階（5：そう思う～1：そう思わない）で評価し、理由を Excel に記入し、送信してもらった。

回収したデータをそれぞれの項目ごとに平均値で算出し、得点の背景（理由）を知るためコメントを分析した。なお、コメントは原則原文どおりにしたが、明らかな誤字・脱字については報告者が修正を行った。コメントの中には拙いながらも英語で書いてくる学生も見られた。

3.2 結果

まず、最初に受けた授業について、自分にとって「役に立つ」と感じたかどうかを尋ね、5 段階評価で回答してもらい、その理由を書いてもらった。結果は図表 3-1-17 と、その理由に示したとおりである。有益だと感じた授業はプレゼンテーションであったこと、また、Wedding など自分のプレゼンテーションテーマに繋がるものなので有益だと感じたということからプレゼンテーションが最も有益だと感じたことが示された。



図表 3-1-17 受けた授業は役に立ちましたか

授業ごとの理由

①board game 楽しかったから。

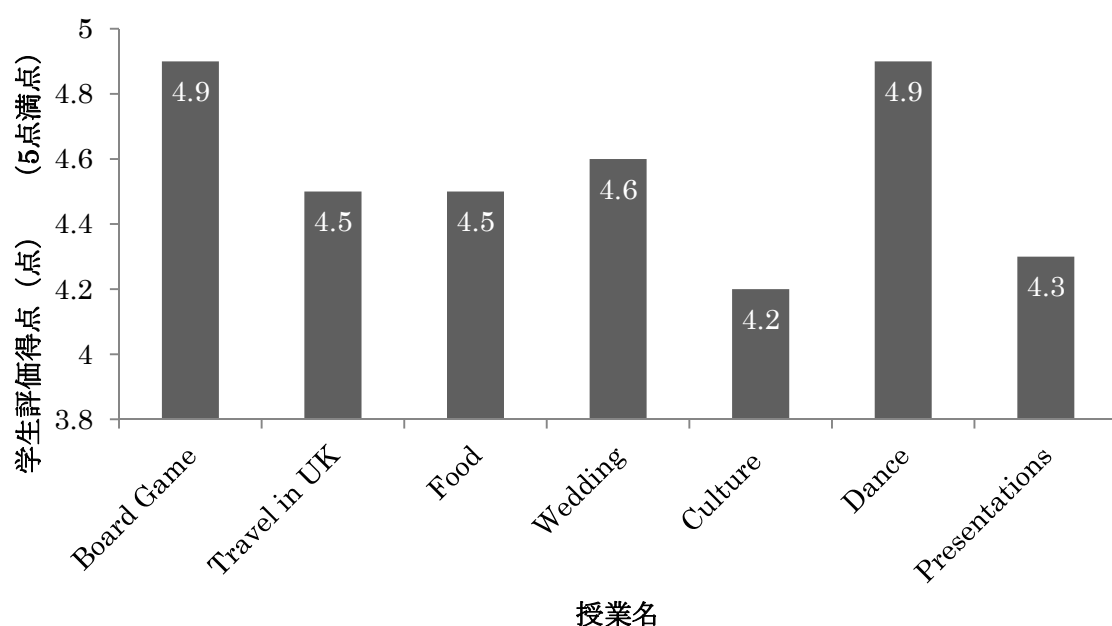
②presentation

- ・ 今まではプレゼンテーションに対して苦手意識があったが、やり方を学んでこれからも役立てられそうだったから。
- ・ プレゼンテーションが少し慣れた感じがした。
- ・ presentation の授業で習ったことは、今後の生活にいかすことができるから。
- ・ 人前で話す免疫が付いたから。
- ・ プレゼンのスキルが身に付いたから。
- ・ 英語でスピーチするという体験は貴重だったから。

③Wedding

- ・ 異文化の結婚式など知らないことが多かったから。
- ・ 自分たちで体験しながら学ぶことができたから。
- ・ 自分のプレゼン内容の授業だったから、事前に調べた事以外の事や実際に体験したりしたから。

次に、受けた授業は「楽しかった（好きだった）か」という質問を行った。その結果、図表 3－1－18 とその理由にあるように、すべての授業で 4 点以上となり、Board Game と Dance が最高得点の 4.9 となった。プレゼンテーションは、4.3 となり、最下位から 2 番目となった。



図表 3－1－18 楽しかった（好きだった）授業

授業ごとの理由

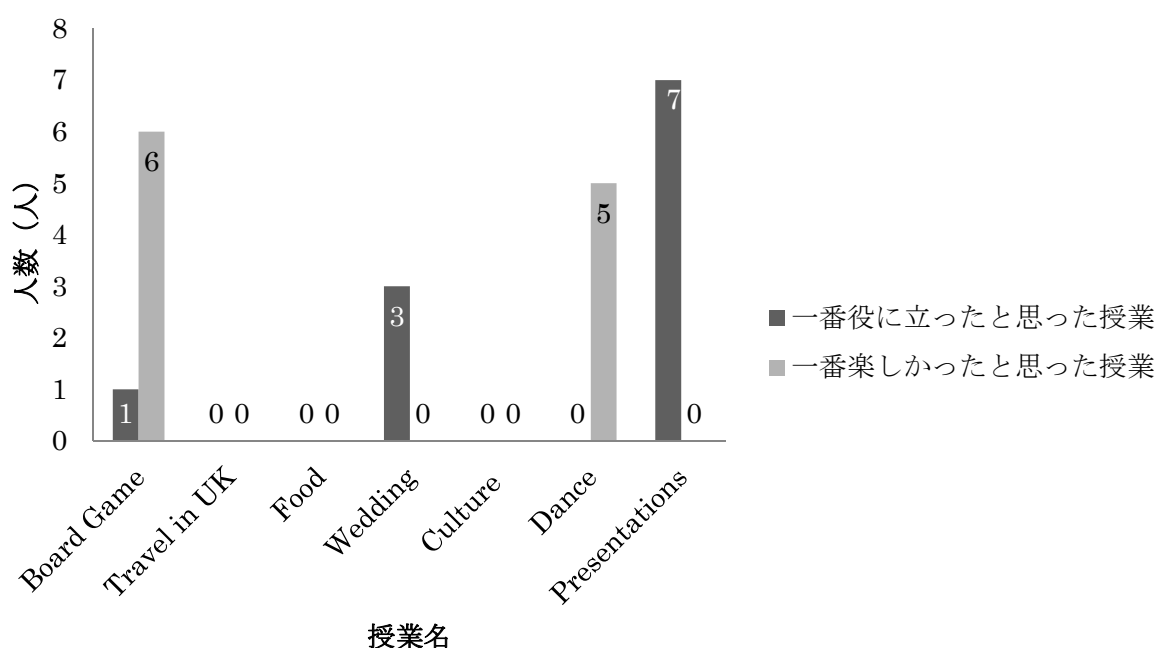
①Board Game

- ・ 今までテレビでしか見たことがなかったことができたから。
- ・ ダーツを初めてした。良い得点がでたから。
- ・ ゲームばかりしたから。
- ・ ダーツを初めて体験してとても楽しかったから。
- ・ やったことのないゲームをすることができたから。
- ・ 先生と一番コミュニケーションをとれた。

②Dance

- ・ 盛り上がるダンスで楽しかったから。
- ・ 体を動かしてイギリスの伝統的なダンスに触れることができたから。
- ・ 自由に動けて、ほかの授業に比べ気が楽だったから。
- ・ きつかったけど、ちょうどよい難しさだった。
- ・ みんなでダンスしたり鬼ごっこしたり、とても仲良くなれたから。

学生にとって役に立つことと、楽しいこととは別なのではないかという予測を立て、それぞれに一番だったものはどの授業だったのかを尋ねた。その結果、図表 3-1-19 に示したように役立ったのはプレゼンテーションが一番であったが、楽しかったのは **Board Game** であるという結果になった。ここから、学生にとって役立つと感じる授業と楽しいと感じる授業は一致しないということが示された。



図表 3-1-19 一番楽しかったと思った授業と役に立ったと思った授業

次に、BH 滞在中の英会話体験による成果・効果は感じられたかを尋ねた。1 名が無回答であった。7 名は感じられた・どちらかといえば感じられたと回答し、1 名は感じられなかった、2 名がどちらともいえないと回答した。その理由は以下のとおりである。上達したと感じた理由に、すべて英語で行われた授業を理由に挙げている学生が多い反面、ネイティブとの交流不足を感じた学生や日本語に頼ったという意見が見られた。

回答ごとの理由

①上達したと感じた

- ・ 2 日目くらいから英語の単語だけでも聞き取れるようになった。全部の授業が英語だったので、そう感じました。
- ・ とても感じた。理由：授業が全部英語で行われたことや、日常生活でも英語を聞いているので英語が聞き取りやすくなったし、英語を少しでも話せるようになった。
- ・ とても感じた。理由：学校での英語の授業のとき、先生の英語が聞き取りやすくなったから。
- ・ とても感じた。理由：授業も外国人スタッフの方が行うので英語を聞いて考えて話そうとする努力ができたから。
- ・ 感じられた。理由：英語しか使えない環境で滞在していくうち覚えた単語などがあつたから。
- ・ どちらかと言えば感じた。理由：先生がネイティブの英語で話していたため、聞くことはもちろん、様々な会話の表現(相槌やリアクション)を知ることができたため。
- ・ 少々身に付いた。理由：BH アドベンチャーや、プレゼンテーション。

②感じなかった

- ・ 日本語につい頼ってしまったのでまったく上達しなかった。理由：英語で話す機会は十分あったが単語がわからず日本語で話してしまった。

③どちらとも言えない

- ・ 理由：説明がすべて英語でされる点。
- ・ あんまり英会話体験ができなかった（特に英語話者と）ので、いまいち実感はない。けど、英語で話そうという気持ちになったり、英語でどういふのかな、と感じることが増えた。理由：(日本人のくせかもしれないが)先生と話す機会よりも先生が何を言っているか聞き取ることが多く、またスタッフの方と英語で話す機会があまりなかった。

次に、どのような授業や過ごし方をしたいかという希望を聞いたところ、以下のような意見があった。ここから、もっと英会話の機会がほしいと考えていることがわかった。

学生意見

- ・ **Writing** や発音練習をしたい。英文法をネイティブの視点から教えてほしい。
- ・ もっと楽しめる要素がほしい。
- ・ リスニングをしてもっと聞き取りたいと思った。
- ・ アフタヌーンティーを体験してみたかった。
- ・ ネイティブスピーカーとより多くの会話ができればいいと思う。
- ・ もっとネイティブの方と話す機会がほしい。

講師の指導や印象についてきいたところ、平均値が 4.5（5 点満点）となり、高い満足度が得られたこと、理由として授業の分かりやすさや指導、対応の良さが目立った。

学生意見

- ・ 楽しくしてくれた。
- ・ とても親切で、積極的に話してくれた。
- ・ 皆さん親切で、授業も楽しかったから。
- ・ ミニゲームが多くわかりやすかった。
- ・ みんなフレンドリーでとても話しやすかった。
- ・ 分かりやすい単語やジェスチャーをしてくださり分かりやすかったから。
- ・ 皆さんフレンドリーで話やすく、とても授業が楽しかった。
- ・ どの先生も気さくでおもしろくて親切に教えてくれたから。
- ・ 聞き取りやすいスピードと発音だったから。
- ・ どの先生もわかりやすく授業をしてくれたから。
- ・ アクティビティが多くて楽しい反面、いつもの授業よりゲームが多くて少し疲れてしまった。質問したらわかるように説明してくれた。

最後に BH の食事・施設・スタッフの印象について尋ねたところどの評価も高く、学生のモチベーションも上がったことが示された。

食事の平均値：4.7

施設の平均値：4.8

スタッフの対応：4.9

学生意見

- ・ ここで出会えたすべての人に感謝したいし、ここで学んだ英語をこれからにも生かしていきたいとなる 4 日間でした。とても充実しました。
- ・ 素晴らしい体験をさせていただきありがとうございました。

- ・ どの授業も楽しくとてもいい経験になった。また行けたらいいと思います。
- ・ 3泊4日でしたが、最終日には帰りたくないと思うほど充実した日々を送ることができました。ありがとうございます。
- ・ 英語が得意ではないのでとても大変な思いをすることが多かったけど... (未完)
- ・ ブリティッシュヒルズでの時間は予想していた以上に楽しく充実していた。
- ・ スタッフの笑顔と対応が素晴らしかった。
- ・ とても楽しく、充実した4日間を過ごさせていただきました。もっと自分の英語力を磨きたいと感じました。

4. 授業の成果、課題および改善点

4.1 語学力および態度の観点から見た学びについて

学生のジャーナル・行動・発言・プレゼンテーションの発表等から、本科目のねらいはほぼ達成されたのではないかと考える。BHのスタッフがこれほどやりがいのあるグループとできたのは初めてで、別れるのは悲しいと言ってくれたほどである。

学生の事後評価が示すように学生の評価は高かった。またプレゼンテーションを中心に据えたことで、様々な活動に意味が持たせられたと考える。本授業の実施により、学生のモチベーションが上がったことと、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度が見られた点では一定の成果が得られたと考えられる。また、BHでなければ学べなかったことは多く、学生からもBHでなかったらこのプログラムには参加しなかったという意見が出るほど、英語を環境全体から学ぶというインパクトがあった。他の研修者（小学生から成人まで）が日本人同士でも英語を使用している姿を学生に見せることも、努力は自らがすべきものであるというメッセージになったようである。

本科目には学力に関する参加資格を設けていない。実際、新カリキュラムにおけるFからA（CEFR レベルのA1～B2+）までのクラス学生が参加した。この中で、教務担当者が本学の教科書やねらいに沿う授業を詳細に聞き取り、柔軟に授業編成等をしてくれたことで、自分たちのテーマに沿った授業を学んでいるという実感を学生が持てたと感じる。学生のコメントからも評価が高かったものの多くは、各自のプレゼンテーマと関係のある授業であった。ここからプレゼンテーションを中心に据えたことは、学生にとっても学びのねらいが明確になり、有効であったと考えられる。

課題も見つかった。BHにおける授業外でのコミュニケーションでは友人同士で固まってしまう、十分に環境を活用しきれなかった学生が多くみられたことである。また、BHでの毎回の授業が完結型であるため、学生に学んだ単語や内容が身についたのかという評価をすることができなかった。学生には毎日英語による日記と最終エッセイを書かせたが、引率教員は現地では授業での活動を観察評価したり、体調不良の学生への対応やBHとの打ち合わせ等で、目を通す時間がなかった。帰校後確認したところ、初歩的な語彙や文法の誤りが散見し、ライティング指導が必要であったことを痛感した。

本科目の成果を確認するため、4月と9月に外部テストを用いるなど、英語力の測定を

する必要があるだろう。また、それ以外の学びについても、どのような効果があったのか、測定方法と基準を今後検討する必要があるだろう。

4.2 その他実施から見えたこと（課題）

今回は、初めて現地集合現地解散とした。英語力というよりは段取り力や計画力を養う場面である。今年は台風等の上陸が多く、学生たちは当初はバラバラに移動する予定であったが、最終的には同じスケジュールで移動することになった。学生の中には、「JR の切符の種類や買い方によって差が生じる」という認識が全くなかった者がいた。きちんと調べていない学生ほど苦情を伝えたが、他の学生から諭される場面もあり、社会のルールに気づく機会になったようである。

今年は研修費を 7 万円程度に抑えることができたが、交通費を入れると 10 万円を超えてしまう。国内で 10 万円なら海外に行くと言って別の授業を履修した学生も実際いる。今回の学生たちの多くは満足度が高かったが、最新版の見積書によると、今後継続していくには 15 名以上がいないと、今年度とは同額にならない。参加してみないとその価値は分からないだけに、今後値上がりする価格と人数確保、および学びの実質化と言う点で課題がある。

事後学習の持ち方も検討課題である。帰校後すぐに授業が始まる。それに伴って学生の生活は忙しくなる。学生の気持ちが熱いうちに、報告会、報告書の作成を済ませることが、学生・教員両者にとってスムーズであろう。

最後に本科目の実施にあたり、助言・援助をしてくださった方々、また 2 科目を実質担当することになったにもかかわらず、学生のプレゼン・英文校閲・評価を分担してくれたランキート助教に感謝申し上げる。

北陸学院大学

アクティブ・イングリッシュ B

担当者：天野 剛至

実施時期：2016 年 9 月 1 日～9 月 16 日 受講者数：20 名

1. 授業の目的・目標

(身につける知識・能力等＝学修成果)

1.1 位置づけと科目概要

2016 年 9 月に 16 日間の予定でアメリカ合衆国ミシガン州グランドラピッズ市に滞在し、ホームステイやボランティア活動、コーナーストーン大学での語学研修を体験する。この研修では出発前の事前学習として、ホームステイでのコミュニケーションに必要な英会話の基礎力を身につけることをはじめ、アメリカの文化・社会やボランティア活動について予習しディスカッションをおこなうほか、現地での修了式における発表を準備する。現地では毎日振り返りの時間を持ち、その日発見したことや学習したことを分かち合う。また、帰国後は事後学習としてレポートを提出するとともに、成果報告をおこなう。なお、本科目は、「全学共通科目」のうち「言語教育科目」に位置付けられている。単位数は 2 単位。2016 年度の新カリキュラム導入により、全学向けに選択科目として設置され、卒業要件単位に読み込まれる。

1.2 授業のねらい

シラバスに表記した授業のねらいは以下のとおり。

- ①英語で積極的にコミュニケーションがとれる。
- ②日本とアメリカのさまざまな文化の違いに気づく。
- ③異文化理解への開かれた態度を持つ。
- ④日本の文化を英語で紹介する。
- ⑤ホームステイを通じてホスピタリティを体験し、理解する。
- ⑥アメリカの大学教育を体験し、日本との違いに気づく。
- ⑦ボランティア活動を通じて、アメリカの社会問題について興味を持って学ぶ。

1.3 参加学生について

参加対象は全学年（大学 1～4 年生、短期大学部 1～2 年生）である。基本的に希望する学生は誰でも履修（研修に参加）することができる。履修条件は特に設けられていないが、学生の学業ならびに学生生活における態度が団体行動上支障を及ぼす可能性があると担当教員側で判断した場合、参加を認めない旨をシラバスに明記している。

2016 年度の参加学生は合計 20 名。内訳は大学・人間総合学部から幼児児童教育学科 2 年生 4 名、3 年生 1 名、4 年生 3 名、社会学科から 3 年生 2 名（大学計 10 名）、短期大学

部・コミュニティ文化学科から1年生9名、2年生1名5名（短大計10名）であった。英語力は、履修者の入学時基礎学力テスト結果からCEFRのA1～B2+に該当し、幅広い差が見られる。

参加動機について、オリエンテーション時にアンケートを実施したところ、「アメリカ（海外）に行ってみたい」、「異文化を体験してみたい」、「（通常の旅行ではなく）ホームステイを体験してみたい」「個人でなく団体で行くので安心だから」等、多くの学生は海外渡航体験を目的として参加した一方で、「自分の英語がどのくらい通用するのか試したい」「英語力に磨きをかけたい」等、英語力の向上を主たる目標として参加した学生はごく少数にとどまった。

2. 授業の内容と方法（活動内容）

2.1 日程および引率

2016年9月1日～9月16日の16日間の日程で、アメリカ合衆国ミシガン州グランドラピッズ市（Grand Rapids）において実施された。引率は、短期大学部コミュニティ文化学科の天野剛至専任講師（科目担当者）と同クリスタル・ランキート助教の2名が務めた。現地での研修日程は、以下の図表3-1-20のとおりである。

2.2 内容

2.2.1 事前学習

渡航前に、オリエンテーションを含め6回に及ぶ事前学習を行った。学生たちはアメリカの地理（ミシガン州およびグランドラピッズ市）、家庭、宗教、教育、貧困、食文化等に関する予習し、それをもとにグループディスカッションを行い、天野講師が説明を補足することで学びを深めた。同時に、毎回ランキート助教からホームステイ用の英会話練習の指導があった。このほか、修了式やボランティア先で披露する日本文化の発表準備に分担して取り組んだ。

全員が毎回課題に取り組む、十分な予備知識を身につけることができた。この予習を通じて、実際に早くアメリカを見てみたいという期待感の高まりにつながった。

2.2.2 現地研修

現地研修プログラムは大きく4つの要素で構成されており、それぞれの内容についてふりかえる。

(1) コーナーストーン大学における英語研修

第1に、本学の提携校であるコーナーストーン大学（ミシガン州グランドラピッズ市）での英語の学びである。これには、①「英語（ESL）レッスン」と、②コーナーストーン大学人文学部教授陣によるアメリカ史や文学などの「特別授業」、および③実際に現地学生に混じって受ける「正規授業」の3つが含まれる。このうち、①の「英語（ESL）レッス

図表 3-1-20 2016 年度「アクティブ・イングリッシュ B」日程

	月日	時間	場 所	摘 要		月日	時間	場 所	摘 要
1	9/1(木)	10:05	小松空港	出発 (NH754)	9	9/9(金)	午前	CU	正規授業見学、礼拝、昼食
		11:20	羽田空港	到着 リムジンバスにて移動 (12:20)			午後	〃	体育館にてスポーツレクリエーション
		16:25	成田空港	成田空港到着 (13:45)			〃	GR 市内	Robinette's にて迷路&買い物
			〃	出国審査後、出発 (DL616)			夕方	キャノン郡区	Lake Bella Vista にてプログレッシブディナー
2	9/2(金)	13:20	MPLS 空港	到着 入国審査	10	9/10(土)	終日		ホストファミリーと過ごす
		17:35	〃	出発 (DL4651)	11	9/11(日)			
		20:05	GR 空港	到着 ホームステイ先へ	12	9/12(月)	午前	CU	正規授業見学、礼拝、昼食
							午後	GR 郊外	David's House にてボランティア活動&施設見学
3	9/3(土)	午前	シルバーレイク州立公園	Mac Wood's Dune Rides	13	9/13(火)	午前	CU	特別授業(俳句&スペイン語)
		午後	ビッグラビッツ	Adams Acres Farm リンゴサイダー作り			午後	GR 中心部	Downtown Market にて昼食 (Slow's Bar BQ) & 買い物、Grand Rapids Public Museum、ダウントウン散策
		終日		ホストファミリーと過ごす					
4	9/4(日)				14	9/14(水)	午前	CU	英語レッスン、礼拝、昼食
5	9/5(月)						午後	〃	修了式準備
6	9/6(火)	午前	CU	英語レッスン、英語テスト、キャンパスツアー、昼食	15	9/15(木)	夕方	〃	修了式
		午後	ロックフォード	North Kent Community Services にてボランティア活動			7:20	GR 空港	出発 (DL1842)
7	9/7(水)	午前	CU	英語レッスン、礼拝、昼食	16	9/16(金)	7:48	MPLS 空港	到着 乗り継ぎ
		午後	GR 市内	NorthPointe Christian Schools 見学			11:24	〃	出発 (DL615)
8	9/8(木)	午前	CU	特別授業(言語学&アメリカ史)	16	9/16(金)	13:55	成田空港	到着 入国審査
		午後	ジョージタウン郡区	Georgetown Shores にてレイクパーティー			18:40	〃	出発 (NH3119)
							19:55	小松空港	到着、解散

【略称】 MPLS: ミネアポリス、GR: グランドラビッツ、CU: コーナーストーン大学

ン」では、同大学院の TESOL 修士課程を修了した 2 名 (Dorothy, Brandy) と大学生 1 名 (Rachel) が交替で教師を務め、学生たちは発音のレッスンや特別授業の予習に関する指導を受けた。②の「特別授業」では、Mike Stevens 教授の「リンカン大統領とゲティスバーグ演説」、Jason Stevens 講師の「俳句の翻訳」、Mike Pasquale 教授の「美しい英語と美しくない英語」、および Leticia Espinosa 講師の「スペイン語のあいさつ」の 4 つの授業を受けた。Mike Stevens 教授の講義はオーバーアクションのジェスチャーと情熱的な語りから例年一番人気であり、今回も多くの学生たちから「もう一度受けてみたい授業」として印象に残ったようである。また、今回初めて実現したスペイン語の授業も学生たちにはまったく新しい言語ということもあって、「新鮮で楽しかった」と好評であった。③の正規授業参加体験では、アメリカ人学生たちが毎回しっかりと予習して授業に臨み、積極的にグループディスカッションや発言をしている様子に、本学学生たちも大いに刺激を受けたようであった。また、レッスン最終日 (9 月 14 日) にホストファミリーを招いて行われた修了式では、学生全員が浴衣姿になり、金沢市と北陸学院大学の紹介とともに、書道・折り紙・花札の日本文化について英語で紹介する機会をもった。

(2) ホームステイ

第 2 に、ホスピタリティあふれるアメリカ人家庭でのホームステイである。学生たちは平日の学校に行く前と帰ってから後の時間はもちろんのこと、週末ともなれば終日一緒にホストファミリーと行動を共にし、買い物に出かけたり、ホームパーティーに参加したり、遠出をしたりと生活に密着した英語に触れる機会をもつことになる。出発前は英語が通じることが不安に感じていた学生たちも、ホストファミリーがきちんと伝えたいことを理解しようとしてくれることに安心感を得て、みずから積極的にコミュニケーションをとることの重要性を学ぶことができた。学生たちが帰国後に提出したレポートで最も多く見られたのがホームステイに関する記述であり、研修の中で最も印象深い体験であったことが伺える。また、ホストファミリーの多くが「来年度もぜひ受け入れたい」と声を掛けてくださり、双方にとって楽しい時間を共有することができたようである。

(3) アクティビティ

第 3 に、豊かな自然にあふれる西ミシガンならではのさまざまなアクティビティである。牧場でのリンゴサイダー絞りやトウモロコシ畑の迷路体験、砂丘ライド、湖でのチュービングやプログレッシブディナーなど、通常の観光旅行では決して体験することのできないこれらのアクティビティに学生たちは大いに満足したようであった。

(4) ボランティア活動

最後に、ボランティア活動と施設見学である。昨年度に続き、今年度も貧困者の支援施設 (North Kent Community Services) と障害者施設 (David's House) を訪問した。North Kent Community Services は、キリスト教系の NPO 運営による貧困層向け栄養補助食品および生活雑貨供給所であり、栄養補助食品 (缶詰、ミックス) の袋詰めと衣類の整理の 2 班に分かれて作業した。ティータイム時にスタッフに施設に関する質問をする機会が設けられた。David's House は、同じくキリスト教系の NPO 運営による障害者向け居住型ケアセンターであり、居住者に書道と折り紙を紹介して交流の時間をもった。その後、スタッフの案内による施設ツアーがあり、重度障害者向けの最新型入浴設備などを見学した。

これらに加えて、今回は初めて現地の幼稚園・小学校 (NorthPointe Christian Schools) を見学する機会を得た。この学校では、通常の英語プログラムとは別にスペイン語のイメージプログラムが導入されており、アメリカ人の子どもたちがスペイン語で学んでいる光景は衝撃的でもあった。教室の雰囲気をはじめ、異なる授業形態や校舎のデザインなど日米の教育の共通点と相違点を目の当たりにして、将来教員を目指している学生には視野を広げる助けとなったことであろう。見学後、放課後の特別プログラムとして、30 人ほどの園児・児童を対象に日本の伝統文化を紹介。「大きな栗の樹の下で」を日本語・英語でそれぞれジェスチャーを変えながら歌い、非言語コミュニケーションの違い(「あなた」「わたし」)について紹介した。日本のダンス (石川サンバ) を披露した後、書道と折り紙のブースを設置し、浴衣を着た 4 人の学生と記念撮影するなどした。当初の 1 時間の予定を大幅に超える 1 時間半経っても残っている子どもたちがおり、好評を博した。

2.2.3 事後学習

帰国後は、学生にホームステイ体験やボランティア活動などいくつかのテーマから興味あるものを選択させ、2,000 文字程度のレポート提出を課した。また、11 月には学内の礼拝（平日 12:10～12:30）の機会を利用して研修報告が行われた。報告は、11 月 4 日（金）・8 日（火）・10 日（木）の 3 回（3 グループ）に分けて実施した。グループ内で協力してパワーポイントのスライドを用意し、グループの全員が報告を分担するように指導し、それぞれ前日にはリハーサルをおこなった上で、当日 10～15 分程度の報告に臨んだ。学生たちはいずれの回も 150～200 名程度の聴衆を前に緊張した面持ちではあったが、発声もよく堂々とした態度で研修での体験とそこで得た成果を報告することができた。

3. 学生による評価

3.1 ルーブリック

2016 年度「アクティブ・イングリッシュ B」では、初回の授業時（6 月 20 日）および研修後（11 月 4～10 日）に、学生に下記のルーブリック（図表 3－1－2 1）を用いて自己評価をしてもらった。参加者 20 名のうち、17 名から有効回答を得た。

図表 3-1-21 「アクティブ・イングリッシュ B」 自己評価ルーブリック

	Ⅳ	Ⅲ	Ⅱ	Ⅰ
(1) 英語への取り組み	授業以外に普段から定期的に英語（読む・聴く・話す・書く）に親しむ機会を設けている。	授業以外に普段から定期的に英語（読む・聴く）に親しむ機会を設けている。	授業以外に時々英語（読む・聴く）に触れる機会を設けている。	授業以外に定期的に英語を学習する機会を設けていない。
(2) 英語でのコミュニケーション	自分から能動的・主体的に英語で話題提供を行ない、コミュニケーションを活発にしている。	自分から能動的に英語でやり取りして、コミュニケーションを楽しむことができる。	自分から英語で自己紹介や挨拶を交わし、質問ができる。	周囲から促されれば、英語で自己紹介や挨拶程度の会話ができる。
(3) 異文化に対する知的好奇心	異文化について、これまでの学習に基づいた詳細で具体的な疑問や幅広い関心を持っている。また、実際の体験から得た新たな疑問や関心を発展させて調べたりするなどして、自らの疑問や関心について掘り下げている。	異文化について、これまでの学習に基づいた詳細で具体的な疑問や関心を持っている。また、実際の体験から得た新たな疑問や関心を発展させている。	異文化について、これまでの学習に基づいた疑問や関心を持っている。	異文化について、単純な疑問や関心を持っている。
(4) アメリカに関する知識	アメリカについて、社会や文化、歴史、最近の動向などを十分に理解したうえで、アメリカが抱える問題などの原因を分析することができる。	アメリカについて、社会や文化、歴史、最近の動向などを十分に理解したうえで、アメリカが抱える問題などを把握している。	アメリカについて、社会や文化、歴史、最近の動向などを十分に理解している。	アメリカについて、社会や文化、歴史、最近の動向などをばくぜんと知っている。
(5) ホスピタリティに関する知識	ホスピタリティについて、定義や特徴、構成要素などを十分に理解したうえで、実際の場面で主客いずれの立場からも満足感を共有することができる。	ホスピタリティについて、定義や特徴、構成要素などを十分に理解したうえで、実際の場面で客人としての立場から満足感を共有することができる。	ホスピタリティについて、定義や特徴、構成要素などをばくぜんと知ったうえで、実際の場面で客人としての立場から満足感を共有することができる。	ホスピタリティについて、定義や特徴、構成要素などをばくぜんと知っている。

3.2 ルーブリックの分析

学生の自己評価の集計結果は、以下図表 3－1－2 2 のとおりである。

図表 3－1－2 2 ルーブリックによる自己評価集計

		IV	III	II	I	平均値 (差)
(1) 英語への取り組み	研修前	2	0	6	9	1.71
	研修後	2	2	<u>5</u>	8	1.88 (+0.18)
(2) 英語でのコミュニケーション	研修前	0	3	<u>10</u>	4	1.94
	研修後	2	6	9	0	2.59 (+0.65)
(3) 異文化に対する知的好奇心	研修前	0	2	<u>10</u>	5	1.82
	研修後	1	14	2	0	2.94 (+1.12)
(4) アメリカに関する知識	研修前	0	2	2	13	1.35
	研修後	2	3	<u>10</u>	2	2.29 (+0.94)
(5) ホスピタリティに関する知識	研修前	0	0	5	12	1.29
	研修後	0	1	14	2	1.94 (+0.65)

※太字は最大値、下線は中央値

(1)「英語への取り組み」については、研修前でも日常的に取り組んでいる学生とまったく取り組んでいない学生の差が見られたが、この傾向は研修後もあまり変化しておらず、平均値がわずか 0.18 ポイント増にとどまっている。一部には帰国後、学内の英語サークル等に参加するようになったり、通学時間を利用して英語の学習を増やしたりと積極的に学習意欲をもつようになった学生も見られるが、残念ながらアメリカでの体験が日常的な英語の学習動機に直結していないことを示している。しかしながら、(2)「英語でのコミュニケーション」については、研修後の平均値が研修前よりも+0.65 ポイント増を示し、より望ましい反応が見られた。「言葉が違う国では分からないことがあればどんな手段でも伝えなければいけないことを痛感した」「身振り手振りや表情の変化などから理解できる部分も沢山あり、感情を共有できた」等のコメントからは、ホームステイの滞在中能動的にコミュニケーションを取る必要性を認識し、文法や発音の間違いを恐れずに話しかけるようになった様子がうかがえる。

一方、学生の間で最も自らの成長を評価できたのが、(3)「異文化に対する知的好奇心」であった。研修前後で平均値が 1.12 ポイント増加し、さまざまな発見と考察に発展している。異なるライフスタイルの中から、特に宗教（日曜日の礼拝、食前の祈り）や家庭生活（食事、シャワー、住居など）、家族の絆といったものへの高い関心が見られた。(4)「アメリカに関する知識」は事前学習も手伝って、ほぼ全員が 1 ポイント評価を上げた。実際にアメリカの経済格差の現実を目の当たりにしたり、福祉・教育現場を訪問したりしたことにより、アメリカ社会を多面的に考えることができたものと思われる。最後に (5)「ホ

スピタリティに関する知識」については、ホームステイを通じて体験したアメリカ人のホスピタリティに感心し、より深い学びにつなげたいと考える学生が多く見られた。

4. 授業の成果、課題および改善点

ルーブリックの自己評価からは、今回の研修を通じて、シラバスに記載した目標のうち「異文化理解」および「アメリカ理解」の分野において、学生が自ら大きな成長を得ることができたと実感していることが明らかとなった。反面、「英語への取り組み」については、残念ながら期待されたほどの持続的成果を生み出すことができなかった。

来年度以降、「アクティブ・イングリッシュ B」という集中科目の名称・内容にふさわしく、英語力を短期間で効率よく磨きあげ、さらに学習動機を持続させることを第一の目標に設定するならば、それ相応のプログラムとなるよう内容の見直しが必要と思われる。

北陸学院大学

赤ちゃんサロン

担当者：熊田凡子・山森泉

実施時期：2014年9月～現在 受講者数：10～20人

1. 授業の目的・目標

(身につける知識・能力等＝学修成果)

①授業の目的

主に保育士を目指す学生が、実習だけでは体験しきれない乳児および保護者と直接ふれあう体験を定期的に持つことにより、「乳児保育」や「保育実習指導」を中心にこれまで保育に関して学んできた知識を、サロンでの個別的関わりを通して身に付ける機会とする。

サロンの活動そのものは特定の授業ではないため、参加学生は複数授業の履修者である。活動の中心となるメンバー（スタッフ）学生はいるが、開かれた学びの場として有志の参加が可能であり、より関心のある学生の学びを深めていくことが可能である。サロンでの体験や気づきを授業での発表に活かすことで、往還的な学びが期待できる。また、実習を含めこれまで大学で学んだ知識を統合して活用し、学生が主体的にサロンの活動内容を考え、展開していくことにより、保育者として必要な「乳幼児の発達」に関する知識、乳幼児との個別的対応、保護者とのかかわり、企画力、環境構成、毎回の協議、振り返り、記録を付けるなど、多様な力を付けることが目標である。

②到達目標

【4年生】

- ・ 大学での学びを総合的に実践でき、単なる観察ではなく主体的にかかわる視点に立って記録に残すことができる。
- ・ 活動に参加して得られた気づきや疑問を、卒業論文（卒業研究）に活用することができる。
- ・ 最終的に得られた学びが、保育者の専門性としてつながりを持つ。
- ・ 実践の指導者として、後輩を意識して行動することができる。
- ・ 社会人として求められる責任を自覚し、企画力、対応力、コミュニケーション力を実践の中で伸ばしていくことができる。
- ・ 毎回の活動を通して、PDCAサイクルを自然に身に付けている。

【3年生】

- ・ 実習での学びとは異なる実践力・対応力が身に付いていく。（乳児とその保護との対応）
- ・ 乳幼児の発達の段階を、授業やテキストでの学びを土台として、体系的・実地的な知識として定着させることができる。
- ・ 周辺の参加をしながら活動のノウハウを学ぶことができ、次年度スタッフを志す学生の

動機づけ、身近なモデル像の獲得につながる。

【1・2年生】

- ・ 子どもとの自然なかかわり方を、先輩学生の姿勢・対応から見て学ぶことができる。
- ・ 専門分野の学習前・学習中の段階で、乳児を中心とする子どもの成長・発達を間近に見ることにより、授業における理論的学びと関連付けや容易となり、意欲的な取り組み姿勢が期待できる。
- ・ 自己の適性について、早い段階から考える機会が得られる。

2. 授業の内容と方法（活動内容）

毎月1回のサロン開催に関する事前準備・当日の運営、事後の振り返りが中心となっている。

【短期的視点での活動】

① 事前の活動

- ・ 毎回の内容についてのスタッフでの打ち合わせ（当日の環境構成、進行、役割分担）
- ・ 準備物作成（遊びの場・玩具・大まかな時間の流れを記した環境構成図の作成と、それに基づいた環境設定）

② 当日の活動

- ・ 使用教室の清掃・環境構成
- ・ 受付、ビデオ撮影、記録（環境図、子どもの動きなど）
- ・ 乳幼児や保護者とのかかわり、個別対応
- ・ 出し物の担当

③ 事後の振り返り

- ・ 環境図・ビデオ・記録を見ながらスタッフ学生と指導教員で話し合い、次回への課題・視点をまとめる。
- ・ 役割分担の中で、当日の実際の環境図と子どもや保護者、スタッフの動き、エピソードなどを記録する。

【長期的視点での活動】

- ・ 毎月の参加乳幼児の発達について、一般的なものと個別なものについて、気づきを共有する。
- ・ 参加する保護者の悩み・課題について教員を中心に受け止めながら、文献などで調べたり、継続的に意図をもってかかわったりしながら、子ども・子育て支援について考えていく。

3. 成績評価の方法（学修成果の評価）

- ① アンケート（参加保護者＝ステークホルダー）を実施する。
- ② 事前準備、事後の振り返りを行うなかで、教員からの指導・助言（形成的評価）を行

う。

- ③ ビデオや事後の振り返り（ディスカッション）、記録を活用して、気づいていなかった（視野に入っていなかった）事象についても、振り返りや仲間のコメントから成果を確認する。

【活動自体の評価方法】

- ・ 参加保護者に対して：年度末（2月・3月）の参加者に、アンケートを実施して、感想・要望を調査する。（2014 年度末に実施。2015 年度末も同様のアンケートを実施する予定）
- ・ 参加学生（スタッフ）に対して：参加保護者対象アンケートに準じた内容の学生版アンケートを実施する。質問の一部は、同じ内容にしてあり、保護者の受け止め方、学生の受け止め方を比較することで、次年度の活動に反映させていく。
- ・ 毎回記録しているビデオを見ながら協議することで、反省と課題をまとめている。

【学生の成長に関する評価】

- ・ ルーブリックを活用して学生の自己評価の変化を確認する。
- ・ 事業責任者である教員が、事前準備の話し合いから、事後の振り返りまで対応する中で、形成的評価を主として口頭で行っている。事前準備や振り返りにおいては、参加スタッフ全員（グループ全体）へ説明し、学生自身の評価も引き出すようにしている。

【ルーブリックによる達成度状況】

目標型コモンズルーブリック全体版（チームワーク）2013 を使用した。2015 年度4月と2月に行った。定義はメンバー個人の行動（チームの課題にかける労力、他のメンバーとの交流におけるマナー、チームの話し合いに対する貢献）とされている。ここで測られるチームワークについては、保育者の資質として求められる専門性であるといえる。結果より、以下のことが言えよう。

（1）チームワークの話し合いへの参加について

（4月）話し合いに、関連した発言までに留まっていた。

⇒（2月）建設的な発言を積極的に行った。

（2）チームメンバーの話し合いの参加の促進

（4月）あいづちやうなずき等での態度で示すことまでの傾向である。

⇒（2月）それぞれに関連付けた発言ができるような流れを作り出していた。

（3）グループワークへの個人の貢献

（4月）作業の遂行に協力していた。

⇒（2月）課題の達成の貢献へとつながった。

(4) チームの雰囲気作り

(4月) メンバーに合わせた発言や行動であった。

⇒ (2月) チームの雰囲気作りのため、フォローおよびサポートがあった。

総合的に、「赤ちゃん・サロン」のスタッフとして当事者意識が高まり、一保育者として責任を持ち、保育チームに所属する役割を一人ひとり自覚し、行動するようになったと考えられる。

4. 授業の成果 (活動の成果、ステークホルダの評価、予想していなかった学生への効果など)

スタッフは有志であるため、もともと保育への関心が高い学生が参加しているものの、保育者として就職する意志が強い学生にとっては、この活動を通して常に保護者とかかわることも含めて「保育専門職」の意識が高まり、サロンでの活動時を中心に、教員の指示がなくても率先して動くことができた。

この点において、企画力・対応力も身につけてきていると思われる。また、3年生は4年生の指示で動いているため、全体に指示待ちの様子となるが、1年後には現4年生と同様の成長がみられることが期待できる。このように、4年制大学というメリットは、先輩後輩の人間関係を学びの場においても活用できることである。開始当初から、その年度の4年生の姿を見て受け継いだ下級生が、自分達なりのアイディアを取り入れながら実践しており、通常の授業では獲得しにくい「縦のつながり」を築くことができている。まさに、教室外学習の成果と言えよう (現在の4年生は、3代目に当たる)。

5. 課題および改善点

【課題として】

大学が行う子育て支援は、単に場所の提供で終わってはならない。また、単発のイベント主催の形では、継続的な視点・学び (子どもの発達理解・保護者との関係づくり) は獲得できない。

継続したかかわりをとおして、学生には、大学における学びと経験を往還させることで、実感を伴った学びとなることが期待できる。参加保護者には、子育てを楽しみかつ自信を得るような場であり、前向き志向の生き方支援となることを目指したい。

学生の学びに関しては、教員の指示で動くのではなく、主体的な行動、学生スタッフ同士の連携、協力も学びの重要な要素である。

今後は大学と地元自治体との連携により、継続的なかかわりを保障しつつ、上述のとおり双方にとっての利点を活用した「総合的な子育て支援のあり方」について検討していく必要がある。

【展望として】

石川県は、保育所を中心に認定こども園への移行が進んでおり、2016 年度は幼稚園 51 園、保育所 243 園、認定こども園 118 園となっており、こども園への移行が顕著である。就学前の子どもの幼児教育と保育を一体的に行うこども園が増えることが、子どもの最善の利益につながり、子育て世代の保護者に対する支援が手厚くなることを歓迎する一方で、この子育て支援制度に“入れない”、あるいは、“入らない”子どもとその保護者に対して、保育者養成大学には何が必要で、何ができるのか。また、そこで学ぶ学生に、子育て支援に関してどこまで理解しておくことが求められるのか、養成校として学生に伝えるべき最低ラインの設定が今後不可欠である。

子育て支援の活動に参加する中で、保育者を目指す学生は子育てについて、あるいは子育て支援について、保護者に何を伝えていくべきなのか、学生の段階では難しい課題である。しかし、「赤ちゃん・サロン」で保護者の生の声を聴いて共感するなど、実際のなかかわりがある学生であれば、表面的な学びの記述で終わらせることはない。事実に基づき、伝えるべき事項や保育者としての願いを文章で表すことができるであろう。保育者になってからは、自身の人間性が現れた喜びなどの感動を保護者と共有し、責任を持った上で言葉に示すことになるであろう。このような支援の重要性を実感できる保育者を育てていく養成校教員の自覚や望ましいかかわり方についても、改めて問い直す必要があると考える。

図表 3 - 1 - 2 3 チームワークループリック

MIP チームワーク評価ループリック

班 学籍番号 氏名

定義: チームワークとは協同におけるメンバー個人の態度、具体的にはチームの課題にかける労力、他のメンバーとの交流におけるマナー、チームの話し合いに対する貢献のことである。

CATEGORY	4	3	2	1	0
チームでの話し合いへの参加	チームでの話し合いにおいて、話し合いを進展させるような建設的発言を積極的にしている	チームでの話し合いにおいて発言を行い、話し合いをリードしている	チームでの話し合いにおいて関連する発言を行っている	チームでの話し合いの場に参加している	全く参加していない
チームメンバーの話し合いへの参加の促進	メンバーの発言に対して、他のメンバーがそれに関連づけて発言できるよう話し合いの流れを作りだすことで、メンバーの積極的参加を促している	メンバーの発言を整理し、関連づけた上で発言するなどして、メンバーの積極的参加を促している	メンバーの発言に対して、あいづちをうつ、うなずくなどして理解を態度に示すことで、メンバーの話し合いへの参加を促している	メンバーの話を遮ることなく聞くようにしている	全く参加していない
グループワークへの個人の貢献	グループワークに積極的に参加して、高い完成度での課題の達成に多大な貢献ができている	グループワークに参加し、課題の達成に貢献できている	グループワークに参加して、作業の遂行に協力している	グループワークに参加して、要望を受けて作業を手伝っている	全く貢献していない
チームの雰囲気作り	チームの状況の変化に応じて、率先してチームの雰囲気をより良くする、あるいは雰囲気が悪くなった時にはそれを解消するような発言や行動をしている	チームの雰囲気を良くするために、自ら率先して発言や行動をしたり、メンバーのサポートをしたりしている	チームの雰囲気が良くなるようにメンバーに合わせた発言や行動をしている	チームの雰囲気を悪くするような発言や行動をしたり、態度に表したりすることなく、チームに参加している	チームの雰囲気を悪くするような発言や行動をしたり、態度に表したりしている 全く参加していない
チームへの助言を聞く態度	自分のチームへの助言だけでなく、他のチームへの助言も真摯に受け止め取り入れ改善する態度が見られる	自分のチームへの助言を真摯に受け止め取り入れ改善しようとしている	助言者のほうを向き、メモを取りながら聞いている	助言者のほうを向いている	まったく聞いていない

Source: KUIS, AAC&U

北陸学院大学

金沢ユニバーサルツーリズム

担当者：田引俊和、天野剛至

実施時期：2015 年 4 月～2016 年 2 月 受講者数：18 人

1. 授業の目的・目標

(身につける知識・能力等＝学修成果)

①授業の目的

本取組では、フィールドワークとグループ討議を中心とした「アクティブラーニング」を、大学・短大の垣根を越えた学内連携のもと共同実施することにより、それぞれの特徴を活かしながら、相互に理解し学びあえる機会を設けることを目的とする。また、連携がもたらす学習効果、課題等を随時検証し、新たな教育プロジェクトにつながる基礎資料が得られるよう努める。

具体的には「地域観光開発」をプロジェクトテーマに取り上げ、地方自治体や民間事業体との連携のもと、幅広い視野で地域社会の事象や諸問題等に関心を持ち、積極的に行動できる人材養成を目指す。

②身につける学修成果

「地域観光開発」を主なテーマとする本取り組みでは、大学と短大でそれぞれ次のようなキーワードと修得を目指す学習項目を設定している。

大学（社会学科）のキーワード

「ユニバーサルデザイン」「バリアフリー」

期待する学習成果（項目）

バリアフリー・ユニバーサルデザインに関する知識、ユニバーサルツーリズムに関する知識、地域社会の特徴・課題の理解。

短大（コミュニティ文化学科）のキーワード

「外国人インバウンド」

期待する学習成果（項目）

インバウンドツーリズムに関する知識、異文化に属する人々との交流（外国人へのインタビュー）、他者（異文化）に対する知的好奇心。

大学、短大が共通で期待する学習成果項目

課題発見・解決力の向上、グループワーク・フィールドワークへの積極的な関与、地域社会への関心。

2. 授業の内容と方法（活動内容）

前述のとおり、本取組では地域観光開発を主たるテーマとしてアクティブラーニングを

試みる。いずれも少人数グループにより「課題解決のための事前学習とグループ討議」→「フィールドワーク」→「まとめ・報告」→「課題再設定」という活動を繰り返し行う。具体的には、大学と短大による「合同ゼミ」の時間を定期的に設け、事前学習で得たそれぞれの視点・専門性による地域社会の課題等を共有、あるいは問題意識の醸成を目指す。「フィールドワーク」では、本取組のメインテーマ、およびそれぞれのゼミの専門性に基づき、実際に金沢の主要観光地で調査活動を行う。活動後は直ちにまとめ、ふりかえり、調査の修正を行ない、回を重ねるごとに有意義な活動になるように努める。

フィールドワーク終了後は結果をまとめるとともに、合同ゼミにおいて報告会を実施する。加えて、報告書作成に向けて内容、構成等を学生主体で検討する。

3. 成績評価の方法（学修成果の評価）

【評価方法】

評価方法として、複数の指標を導入する。

（１）ルーブリック

教員にとって効果的なフィードバックを行い、学生の学びを促進する評価ツールとしてルーブリックを導入する。ルーブリックは、教員側にとって学生の学習状況の把握に有効であるだけでなく、学生にとってもどう評価されているかが明確となり、授業への参画の促進と公平性に対する認識の促進に役立つ（Stevens, D. D. & Levi, A. J. [2004] *Introduction to Rubrics: An Assessment Tool to Save Grading Time, Convey Effective Feedback, and Promote Student Learning*, Stylus Publishing, pp. 17-28）。

ルーブリックは大学・短大の共通のもの 1 種類と大学・短大それぞれのゼミ用のもの 2 種類の計 3 種類を用意した。（次の「ルーブリックによる達成度状況」の項参照）

（２）まとめ・報告書

各回の合同ゼミにおいてグループ別に学生が「まとめ」のプレゼンテーションを行い、指導教員ふたりが評価する（講評を述べる）。同様に、学生が提出した活動報告書（レポート）について、指導教員が評価する。学生はその評価を踏まえて、ルーブリックで自身を評価する。

（３）プレゼンテーションと外部評価者

（２）により客観性を付与する目的で、外部評価者を招いてプレゼンテーションを行い、評価をしてもらう（講評を述べる）。学生はその評価を踏まえて、ルーブリックで自身を評価する。

【ループリックによる達成度状況】

(1) 共通ループリック (図表 3-1-24 参照)

目標テーマ：大学と短大の垣根を越えて互いに連携しながら、フィールドワークやグループディスカッションなどアクティブラーニングの活用により課題の設定（再設定）とその解決に向けて積極的に行動し、アウトプットできるようになる。評価項目として、①テーマの立て方・調査目的、②フィールドワーク、③グループディスカッション、④合同ゼミの活動目的、⑤課題の抽出・再設定、⑥アウトプット（報告書）を設定。18名中17名の学生が、上位移行達成を果たした。

(2) 大学・田引ゼミ用ループリック (図表 3-1-25 参照)

目標テーマ：社会全体の動向を把握し、ニーズや課題を考えるという社会学の視点・専門性を生かした地域観光開発に取り組む。具体的には、年齢や国籍、障がいの有無などを問わずに誰もが楽しめる「ユニバーサルツーリズム」を検討・提案する。評価項目として、①バリアフリー・ユニバーサルデザインに関する知識、②地域社会の特徴・課題の理解、③ユニバーサルツーリズムに関する知識を設定。9名中9名の学生が、上位移行達成を果たした。

(3) 短大・天野ゼミ用ループリック (図表 3-1-26 参照)

目標テーマ：他者（異文化）に対する興味・関心を抱き、英語を実際に運用し、柔軟な態度でコミュニケーションできるようになる。具体的な活動として、金沢市を訪れる外国人旅行者にアンケート調査を実施し、金沢インバウンド観光開発につながる提案をする。評価項目として、①他者（異文化）に対する知的好奇心、②異文化に属する人々との交流、③インバウンドツーリズムに関する知識を設定。8名中8名の学生が、上位移行達成を果たした。

4. 授業の成果（活動の成果、ステークホルダの評価、予想していなかった学生への効果など）

大学の社会学科では3年生9名が年度初めの4月から本プログラムに参加し、大きな成果を得た。たとえば、「地域社会の課題を意識する」、「実際にフィールドワークを行ない調査・確認する」、「現地調査の結果をまとめ、報告書を作成する」という一連の活動を体験することにより当該学生にとって貴重な学びの機会となったと考える。加えて、短大コミュニティ文化学科との合同ゼミも通常授業では得られない学びの場となった。

総じて、本プログラムへの参加は学生一人ひとりの学修成果につながっており、それはループリックの結果でも確認できる。それ以上に、フィールドワークの結果を報告書として書き上げた後の彼ら自身の驚き（いい意味で）、あるいは感動する姿は、本プログラムへの参加の効果を表しているといえる。報告書という成果物はもちろん、その過程では学生にとって容易ではない部分も少なからずあったものの、すべてが学びにつながったと確信する。

短大のコミュニティ文化学科では、「異文化に属する人々との交流」という点で大幅な成長が見られた。フィールドワーク当初は、外国人旅行者に話しかけることができず何度も素通りさせてしまっていた。それは「最初は英語も上手く話せないし、大丈夫かなって心配だった」（学生YH）、「外国人と話すのは緊張した」（学生YM）という学生のコメントにもうかがえる。しかし、フィールドワーク終了後には「回数を重ねていくうちに自然と会話ができるようになって嬉しかった」（学生YY）、「とてもフレンドリーだったのでたくさん質問することができた」（学生YH）、「予想以上に金沢には外国人観光客がいることがわかり、金沢の魅力を再発見する良い機会となった」（学生NM）など、コメントにも余裕が見られるようになった。一方、参加者の発表を聴いた他の学生からは、「見知らぬ外国人に話しかけることなんて想像もつかない」「勇気がある」などのコメントがあり、参加学生の成長を測ることができた。

その他の成果として、次の点があげられる。

大学の社会学科では、報告冊子の制作にあたり、印刷業者と印刷行程および納期に関する打ち合わせを体験した。印刷・製本に至るまでの過程を学ぶとともに、スケジュール管理の重要性などについて理解する機会を得た。また、参加した学生のうち数名が本取り組みを継続して4年次の卒業レポートとしてまとめることを予定している。

短大のコミュニティ文化学科では、1・2年生を対象とした「卒業レポート発表会」の中で、4人の学生がフィールドワークに基づく活動報告をおこなった。約40名の聴衆があり、うち5人の学生が2016年度に「インバウンド観光開発」の専門ゼミを選択した。

5. 課題および改善点

今回の取組では一定の成果がみられたものの、調査の視点、項目等は学生だけで検討したもので一般化するには限界がある。また、最終段階で大学、短大とも外部関係者との接触、あるいは報告会等の機会を設けたが、テーマとして掲げた「地域観光開発」に対する具体的な貢献にまでは至っていない。

今後は、当事者・関係者等のニーズを把握したうえで、根拠に基づいた調査等を行なう必要がある。併せて、活動成果を実際に地域の観光推進、街づくりに活かせるような取組も求められる。報告書、報告会、関係者との連携など、具体的に意識していかなければならない。

図表 3－1－2 4 合同ゼミルーブリック

合同ゼミルーブリック:共通

人間総合学部社会科学科田引ゼミと短期大学部コミュニティ文化学科天野ゼミでは、それぞれの特徴と専門性を活かしながら合同で「金沢ユニバーサルツーリズム～地域観光開発に向けた検討・予備調査」に取り組む。多様な人々に対応する金沢観光を提案することで地域社会への関心をもち、これに貢献すること、また、大学と短大の垣根を越えて互いに連携しながら、フィールドワークやグループディスカッションなどアクティブラーニングの活用により課題の設定（再設定）とその解決に向けて積極的に行動し、アウトプットできるようになることを目標とする。

	4	3	2	1
テーマの立て方・調査目的	明確で実現可能なテーマが設定されており、それについての独自の仮説や調査項目が詳細に示されている。	実現可能なテーマが設定されており、一般的な仮説や調査項目が示されている。	テーマが設定されており、調査項目がばくぜんと示されている。	テーマが明確でなく、調査項目が分かりにくい。
フィールドワーク（現地調査）・課題の再設定	調査に基づいて、明確に浮かび上がってきた課題の抽出・再設定を何度も繰り返すことができる。	調査に基づいて、明確に浮かび上がってきた課題を抽出し、再設定できる。	調査に基づいて、ばくぜんと浮かび上がってきた課題を新たに設定できる。	調査はしたもの、新たな課題の設定ができない。
グループディスカッション	グループでの話し合いにおいて、話し合いを進展させるような建設的発言を積極的にしている。また、グループの状況の変化に応じて、率先してグループの雰囲気より良くする、あるいは雰囲気が悪くなった時にはそれを解消するような発言や行動をしている。	グループでの話し合いにおいて発言を行い、話し合いをリードしている。また、グループの雰囲気を良くするために、自ら率先して発言や行動をしたり、メンバーのサポートをしたりしている。	グループでの話し合いにおいて関連する発言を行っている。また、グループの雰囲気が良くなるように、メンバーに合わせた発言や行動をしている。	グループでの話し合いの場に参加している。また、グループの雰囲気を悪くするような発言や行動をしたり、態度に表したりすることなく、ディスカッションに参加している。
合同ゼミ	合同ゼミの活動目的を明確に理解している。ディスカッションに能動的に参加しており、自ら積極的にプレゼンや報告書作成にも携わっている。	合同ゼミの活動目的を明確に理解している。ディスカッションに能動的に参加しており、周囲からの要請があればプレゼンや報告書の作成も行う。	合同ゼミの活動目的をばくぜんと理解している。また、ディスカッションやプレゼンにも参加している。	合同ゼミの活動目的をよく理解していない。また、ディスカッションやプレゼンにあまり参加していない。
アウトプット（報告書）	研究から明らかになったことについて整理し、専門基礎知識を効果的に用いて、論理的に説明できている。また、論理的に一貫した内容になっており、説得力がある。	研究から明らかになったことについて整理し、専門基礎知識を用いて論理的に説明できている。また、結論に至るまでのプロセスは、基本型（序論、本論、結論）を用いて構成している。	調査・研究から明らかになったことについて記述し、専門基礎知識をある程度用いて説明できている。また、構成・展開の型や、内容の論理性に改善すべき点がある。	調査・研究から明らかになったことについての記述しかできていない。また、結論は示されているが、なぜそのような結論になるのかわかりにくい。

図表 3－1－25 ゼミルーブリック

合同ゼミルーブリック：ユニバーサルツーリズム(田引ゼミ)

高齢者や障害者にも対応したバリアフリー、ユニバーサルデザインに基づく街づくりは、社会全体に求められている。北陸新幹線の開業を機に石川県が以前にも増して観光地として注目を集めていることから、2015 年度の田引ゼミ（合同ゼミ）では、社会学科の視点・専門性を生かした地域観光開発に取り組む。社会全体の動向を把握し、ニーズや課題を考えることは社会学科の学びの中心であるから、年齢や国籍、障がいの有無などを問わずに誰もが楽しめる「ユニバーサルツーリズム」を検討・提案することをめざす。

	4	3	2	1
バリアフリー・ユニバーサルデザインに関する知識	バリアフリー・ユニバーサルデザインについて、十分な認識をもっており、さらにこれまでの施策の推進状況や今後の取組方針についても把握しているだけでなく、現状が抱える諸問題の改善策を提案することができる。	バリアフリー・ユニバーサルデザインについて、十分な認識をもっており、さらにこれまでの施策の推進状況や今後の取組方針についても把握している。	バリアフリー・ユニバーサルデザインについて、基本的な認識をもっている。	バリアフリー・ユニバーサルデザインについて、それがどんなものであるかばくぜんと知っている。
地域社会の特徴・課題の理解	自分が所属する地域社会の特徴について、十分かつ専門的な知識をもっている。また、地域社会が抱える課題も明確に理解しており、改善策を提案することができる。	自分が所属する地域社会の特徴について、十分な知識をもっている。また、地域社会が抱える課題も基本的に理解している。	自分が所属する地域社会の特徴について、基本的な知識をもっている。また、地域社会が抱える課題もばくぜんと理解している。	自分が所属する地域社会の特徴についてばくぜんとした知識しかもっていない。また、地域社会が抱える課題もよく知らない。
ユニバーサルツーリズムに関する知識	ユニバーサルツーリズムについて、定義や日本国内の現状、最新の世界標準の動向などを十分に理解したうえで、諸問題の改善策を提案することができる。	ユニバーサルツーリズムについて、定義や日本国内の現状、最新の世界標準の動向などを十分に理解したうえで、取り組むべき問題点を把握している。	ユニバーサルツーリズムについて、定義や日本国内の現状、最新の世界標準の動向など基本的な知識があり、理解している。	ユニバーサルツーリズムについて、定義や日本国内の現状、最新の世界標準の動向などをばくぜんと知っている。

図表 3－1－26 ゼミルーブリック

合同ゼミルーブリック：インバウンドツーリズム(天野ゼミ)

2015 年度の天野ゼミ（専門ゼミⅠ・Ⅱ）では、「Think Global, Act Local」をメインテーマに、地球規模（グローバル）の視点からものごとを捉え、地域（ローカル）において問題解決に向けた行動を実践することを目指す。具体的な活動として、金沢市を訪れる外国人旅行者にインタビュー（アンケート調査）を実施し、金沢インバウンド観光開発につながる提案をする。そのために、フィールドワークを通じて、他者（異文化）に対する興味・関心を抱き、英語を実際に運用し、柔軟な態度でコミュニケーションできるようになることをめざす。

	4	3	2	1
他者（異文化）に対する知的好奇心	他者（異文化）について、これまでの学習に基づいた詳細で具体的な疑問や幅広い関心を持っている。得られた応答をもとに、さらにものの見方を発展させたり調べたりするなどして、自らの疑問や関心について掘り下げている。	他者（異文化）について、これまでの学習に基づいた詳細で具体的な疑問や関心を持っている。得られた応答から、新たな疑問や関心を発展させている。	他者（異文化）について、これまでの学習に基づいた疑問や関心を持っている。	他者（異文化）について、単純な疑問や関心を持っている。
異文化に属する人々との交流(外国人へのインタビュー)	異文化に属する人々との交流（外国人へのインタビュー）の場面では、自分から能動的・主体的に英語で話題提供を行ない、コミュニケーションを活発にしている。	異文化に属する人々との交流（外国人へのインタビュー）の場面では、自分から能動的に英語でやり取りして、コミュニケーションを楽しむことができる。	異文化に属する人々との交流（外国人へのインタビュー）の場面では、自分から英語で自己紹介や挨拶を交わし、質問ができる。	異文化に属する人々との交流（外国人へのインタビュー）の場面では、周囲から促されれば、英語で自己紹介や挨拶程度の会話ができる。
インバウンドツーリズムに関する知識	インバウンドツーリズムについて、政府の政策や現状、最近の動向などを十分に理解したうえで、諸問題の改善策を提案することができる。	インバウンドツーリズムについて、政府の政策や現状、最近の動向などを十分に理解したうえで、取り組むべき問題点を把握している。	インバウンドツーリズムについて、政府の政策や現状、最近の動向などを十分に理解している。	インバウンドツーリズムについて、政府の政策や現状、最近の動向などをばくぜんと知っている。

北陸学院大学

キャリアデザイン概論Ⅰ（MIP）

担当者：小林正史、俵希實、米田佐紀子、西村洋一、若山将実、松下健

実施時期：2015 年 4 月～2015 年 7 月 受講者数：35 人

1. 授業の目的・目標

（身につける知識・能力等＝学修成果）

○授業の目的

授業の目的は、2 つ指摘することができる。一つ目は、社会で必要な力に気づき、その運用法を知る事である。もう一つは、その社会で必要な力を身につけるために、大学でいかに学ぶかを自らが考え、行動することである。これらの目的に従って、授業では、実際の社会が抱える課題を知り、チームで課題解決に取り組む。具体的には、2 つの企業の担当者から実際に企業が社会で直面している課題を受け取り、その課題を解決するためにチームで取り組む。そして、その成果について中間プレゼン・最終プレゼンを行い、企業担当者からフィードバックを受ける。

○到達目標

本教育プログラムの到達目標としては、以下の 3 点が挙げられる。

- ① 社会で必要な力に気づく。
- ② 自分に足りない能力や知識、自分の興味、性格、能力の強みに気づく。
- ③ 社会に出るまでにつけなければならない能力や知識を残りの大学生活の中でどのように習得していくのかを考えることができるようになる。

2. 授業の内容と方法（活動内容）

本教育プログラムは、以下のとおり 15 回に渡って行われた。

- ① ガイダンス：授業の目的、流れ、方針と評価方法、チームに貢献するためのルールについて理解する。
- ② 課題とは何か？：「課題」とは何かを理解し、「課題」に取り組むために必要なディスカッションの基本的な手法を学ぶ。
- ③ Mission を受け取る：北陸電力株式会社の担当者から Mission を受け取る。課題や目標となるゴールを正しく理解する。
- ④ 中間プレゼンに向けて：チーム活動。中間プレゼンの目的や心構え、準備について理解し、どのように議論を進めるべきかをチームで検討する。
- ⑤ 中間プレゼン：北陸電力株式会社の担当者の前で中間プレゼンを行う。企業担当者からのフィードバック、他のチームのプレゼンなどから議論を再構築する。
- ⑥ 最終プレゼンに向けて：チーム活動。簡潔にわかりやすく伝えるプレゼンをするための注意事項を理解し、準備を整える。

- ⑦ 最終プレゼン：最終プレゼンを行い、北陸電力株式会社の担当者からフィードバックを受ける。チームで、自分たちの議論および活動をふりかえる。
- ⑧ 課題解決に必要なスキルを知る：クリティカルシンキングの大まかな概要をつかむ。
- ⑨ Mission を受け取る：石川県企画振興部企画課の担当者から Mission を受け取る。課題や目標となるゴールを正しく理解する。
- ⑩ 中間プレゼンに向けて：チーム活動。企業担当者からどのようなアドバイスをもらえば議論が進むのかを整理する。
- ⑪ 中間プレゼン：石川県企画振興部企画課の担当者の前で中間プレゼンを行う。石川県企画振興部企画課の担当者からのフィードバック、他のチームのプレゼンなどから議論を再構築する。
- ⑫ 最終プレゼンに向けて：チーム活動。簡潔にわかりやすく伝えるプレゼンをするための注意事項をチェックし、準備を整える。
- ⑬ 最終プレゼン：最終プレゼンを行い、石川県企画振興部企画課の担当者からフィードバックを受ける。チームで、自分たちの議論および活動をふりかえる。
- ⑭ 全体のふりかえり：授業での経験をもとに、残りの大学生活をどのように過ごすのかをまとめる。

前期の初めに各自が設定した中期目標と長期目標がどの程度達成されたか振り返る。それを踏まえて、今後の大学生活と授業にどのように臨むかについて「自分宣言」を行う。

3. 成績評価の方法（学修成果の評価）

○成績評価

本教育プログラムでは、以下の3つの基準によって成績評価を行った。

- ① 受講態度：積極的に授業およびグループワークに参加しているか。
- ② 提出物：(1)期限内に提出しているか、(2)課題に即した内容となっているか（たとえば、毎回提出するリアクションシートの場合は、ふりかえりが記されているか、規定字数を満たしているか、で評価）。
- ③ 発表：(1)発表内容、(2)発表態度、(3)質疑への応答。

なお、②の提出物においては、提出物としてルーブリック（関西国際大学のプレゼンテーションおよびグループワークルーブリックを基に作成）を使って学生の自己評価および教員による評価を行っている。

○ルーブリックによる達成度状況

本教育プログラムにおいては、前述のようにプレゼンテーションおよびグループワークルーブリックを作成し、学生の自己評価と6人の教員による評価を行った。それを見ると、学生の自己評価は概ね高い数値を表しているのに対し、教員による評価は低くなる傾向が見られた。学生と教員双方においてルーブリックを使って学びの成果をどれだけ客観的に測ることができるのかは、今後の課題といえるだろう。ルーブリックがこうした課題解決

型学習においてどのように使えるのか（使えないのか）は、より検討していく必要があるように思われる。

4. 授業の成果（活動の成果、ステークホルダの評価、予想していなかった学生への効果など）

本プログラムが導入された 2014 年度以降入学の社会学科学生と、それ以前に入学した学生を客観的数値というより、むしろ筆者の主観的・印象論的に比べるとすれば、若干ではあるが本プログラムを必修として受講している 2014 年度以降の学生の方が出された課題を検討し、解決策をまとめ、そしてそれを口頭で発表することに慣れている学生が多いように感じられる。

5. 課題および改善点

今後の課題として、以下の 2 点を挙げたい。

第一に、フリーライダーの学生をどのように主体的な学びに参加させるかという課題がある。グループによってはフリーライダーとなった学生が多く、活動に支障をきたした例もあった。本教育プログラムはカリキュラム上必修の授業であり、この課題を解決することはなかなか困難ではあるが、新年度以降も様々な改善方法を試みていきたい。

第二に、授業外での学習活動をどのように評価するかという課題である。企業から提示される課題は、新入生にとって授業内だけで解決できるほど容易な問題ではない。そのため、授業外で多くの時間をグループで課題解決のために時間を費やす必要が出てくる。授業内でのグループ活動であれば教員によって一人ひとりの学生の学習を観察できるが、授業外では難しい。そのため、授業外でどの学生が主体的に学習活動を行っていたのかを客観的な指標によって測ることができないのである。授業外での活動を今後どのように評価していくのか、可能な限り客観的に評価できる仕組みを構築していく必要があるだろう。

くらしき作陽大学

アセンブリー・アワー（ふるさと集会）

実施時期：全学 1 年生 受講者数：1 クラス 20～30 名

1. 授業の目的・目標（身につける知識・能力等＝学修成果）

本学では、全学 1 年生必修科目として、アセンブリー・アワーという授業がある。アセンブリー・アワーという授業は、本学独特のものである。この授業のねらいとしては、①建学の精神の教育、②初年次教育、③就業力の育成、④生活指導、⑤全学の一体感の醸成、の 5 項目である。これらの目的のために次の 3 種類の内容を実施している。すなわち、1) 月例集会（全体）、2) ホームルーム（学科別）、3) 各種講座・行事（全体）であり、これらは相補って 5 項目の目的を達成している。

本学は「大乘仏教に基づく人間性の涵養」を建学の精神としており、1) はその達成のために、月 1 回学長の法話を中心とし、セレモニーや教員感話、学生感話を実施している。学生には学長の法話を聞いてレポートを作成することを課しており、レポートはアドバイザーの教員が添削した後学生に見直しを行わせ、最終的に学長が目を通していている。このことは学生の文章力を高めるねらいもある。2) は生活指導や学科に応じた内容の指導を行い、また先ほどのレポートの指導もここで行っている。3) は健康講座やカルト講座、人権講座などである。この科目の担当は 1 年生の担当のアドバイザー約 40 名が当たっている。授業の運営の中心はアセンブリー・アワー運営委員会が行っている。この委員会は年間のスケジュール、講座の担当講師の手配、成績の管理などを行う。このように多くの教員が関与しているため、この授業を改善していくことで高い波及効果が期待されている。

2. 授業の内容と方法（活動内容）

ふるさと集会は、アセンブリー・アワーの取り組みの一つとして H26 年度まで実施されていた。これは、全 30 コマの授業回数のうち、4 コマを使用して小集団活動を行い、2 コマを使って発表会を行うものであり、学部、学科を超え、学生の出身地ごとに 20 人から 30 人の 18 クラス編成を行い、出身地にちなんだテーマについて討議、情報収集、分析、まとめを行い、最後に全体で発表会を行うものであった。

図表 3-1-27 は、学生が考えたテーマの一例である。これらのテーマ設定も各グループの学生たちが話し合って決め、それにしたがって情報収集等を行なった。そして、最終的な発表のためにプレゼンテーション資料を作成した。このように学部学科を越えたクラス編成を行い活動することによって学部学科を越えた交流を図るとともに、小集団活動でコミュニケーション能力や企画力、分析力などを高めることを期待して行われた。

アセンブリー・アワーは多くの教員が関与する科目である。特にふるさと集会は 2 人ないし 3 人の教員が学生を直接的に、学生に主体的に議論するように指導する必要がある。また、全体ではほぼ同じ方向性を持って指導することも求められる。平成 24 年度まではアセン

ブリー・アワー運営委員会で作成した指導案という形で各教員に提示していたが、どこに重きを置いて指導するかの狙いの徹底はできていなかった。また、各クラスの授業を進めた結果の把握ができていなかった。そこで H25 年度より、ふるさと集会において、指導方法の共通化や結果の評価、フィードバックができるように共通の評価指標としてのルーブリックの導入を行った。



図表 3－1－27 テーマの例

3. 成績評価の方法（学修成果の評価）

ふるさと集会は前述のとおり、学生の出身地ごとにクラス編成を行い、出身地にちなんだテーマについて討議、情報収集、分析、まとめを行い、最後に全体で発表会を行うものであった。これにルーブリックを導入するにあたり留意した点は、1) 学生がどのようなことを求められているかを明らかにすること、2) 学生の自己評価ができること、3) 教員がどのような観点に重点を置いて指導すればよいか明らかにすること、4) 教員が学生の活動を評価できるようにすること、の 4 点である。これらに鑑み評価項目として、討議の段階では「目的設定」、「分析」を教師用に、コミュニケーションの能力を現すものとして「共感性」を学生用に選んだ。なお、平成 26 年度は学生に「目的設定」「分析」「共感性」の 3 つ全てを評価させるようにした。ただし、この授業は発表会を除くと 4 回しか担当できず、

また教員が必ずしも自身の所属する学部学科の学生を担当する訳ではないため、学生一人ひとりを明確に区別することが難しい。そのため、教員はグループ全体での評価を行うこととした。グループ全体と個人の評価という違いはあるが、教員の評価を学生にフィードバックすることによって、学生たちに、自分たちの活動がどのレベルにあるのかをある程度客観的に振り返ることができるようにすることがねらいであった。発表については数名の教員が、「プレゼンテーション」、「分析」の二項目で評価を行った。使用に当たっては、全体に行ったオリエンテーションで記入の仕方の説明を行い、また用紙に記入例も含めた説明をつけた。

4. 授業の成果（活動の成果、ステークホルダの評価、予想していなかった学生への効果など）

教員によるルーブリック評価の学生へのフィードバックに関しては、学生個人の評価についてフィードバックすることが難しいという問題があった。そのためグループ単位での評価にとどまった。また、プレゼンテーションの評価については、その結果を各学科のホームルームで紹介するという形をとった。そのため、学生のグループディスカッションやプレゼンテーションなどのスキルを向上させるという観点からすると不十分な点も多いと考えられる。しかし、アセンブリー・アワーは初年次教育という側面も持っており、このふるさと集会で全てを完結させる必要もないといえる。ここでの学びを元に、他の授業等でさらに伸ばしていくということが必要であろう。

また、ルーブリックについても内容の吟味や評価方法に関する各教員の習熟などが大きな課題である。これらについても引き続き検討し、対応していくことが求められる。

ふるさと集会は、平成 26 年度で終了し、平成 27 年度よりこれを発展させた「くらしき学講座」を行うことになった。活動の形としてはふるさと集会を踏襲しているが、活動の内容を地元倉敷での地域貢献活動とし、地域での学びを行うというものである。「くらしき学講座」は 4 年間を通しての学修プログラムとなっており、先述したふるさと集会の課題をクリアにしていくことが期待される。

くらしき作陽大学

音楽貢献実践（ヤングコンサート、Café de lien）

実施時期：全学 1 年生 受講者数：1 クラス 20～30 名

1. 授業の目的・目標（身につける知識・能力等＝学修成果）

本学では、平成 27 度より、「くらしき学講座」として様々な地域貢献活動に取り組んでいる。その中で、音楽学部では、音楽貢献実践という科目の中で、地域貢献活動を行っている。ヤングコンサートは、この音楽貢献実践Ⅰの取り組みである。

このプログラムでは、音楽学部の学生が地域社会における音楽活動を通じて自らの音楽力を高めるだけでなく、企画・運営・評価・改善の PDCA サイクルを通じて総合的な社会人を体得させることを目的としている。

2. 授業の内容と方法、成果（活動内容、活動の成果、ステークホルダの評価、予想していなかった学生への効果など）

ヤングコンサートでは、本学の地元である玉島市民交流センターや倉敷市立大原美術館においてコンサートを開催した。コンサートでの演奏はもちろんの事、チラシやプログラム作成、会場作り、集客など全てを学生たちが企画し、行った。具体的な活動の流れとしては、①プログラム（選曲・MC など）の考案、②通し稽古、③コンサート、④アンケートを踏まえた反省および次回のコンサートの改善に向けた話し合いというサイクルで行われた。通し稽古では、演奏や MC などを一通り確認するとともに、実際にお客様の立場になって稽古に参加することで多くの改善点等を見つけ、コンサートの改善に役立てた（図表 3-1-28）。このような PDCA サイクルで、コンサートは全 12 回開催された。

コンサートは玉島市民交流会館のロビーだけでなく、美術展示室で行ったり、また、ただ演奏するだけでなく子ども教育学部の学生と協力して紙芝居による演出を入れたり、倉敷市立大原美術館のイベントに合わせてウェルカムコンサートやオープニング・ピアノコンサートを行うなど、様々な工夫を行った。特にヤングコンサートは、大学院も含む全学年の開講科目であり、地域と連携をした活動を行うことにより、学生たちは①季節・年齢層・演奏環境にあったプログラムを企画する力②演奏を聴きに来てくださるお客様の立場になって考えることの重要性、③奏者としてどう演奏会を運営していくかといった、演奏会までのプロデュース力といった点を学ぶことができた。



図表 3-1-28 PDCA サイクル

また、音楽貢献実践Ⅳでは、①演奏者の希望・力量を適切に判断し、より発展性のある発表の場を提供する、②従来の形式にとらわれず、新しいことを為すために必要な企画力・交渉力の元になるものを見つける、という授業到達目標のもと、人々に喜んでもらうために自分たちは何ができるか、ということを考えながら具体的な活動を企画し運営していくことを行った。具体的な活動内容としてはヤングコンサートと同様である。その中で、①いろいろなところから音楽が聴こえてくる大学にする、②他学部の人にも音楽を楽しんでもらう、という目標を設定し、Café de lien (カフェ・ドゥ・リアン) という活動を行った。これは、本学の食堂棟にある喫茶室でのミニコンサートであり、様々な楽器とのコラボや、児童文化部の人形劇とのコラボなどを行い、他学部の学生も気軽に聞くことができ、その結果としてホールでのコンサートにも興味を持ってもらうということを意図して行われた。そのための企画の立案や、ピアノの搬入といった必要な交渉などを行っていくことで、学生たちは①どうすればお客様に楽しんでもらえるか、といった企画力、②企画したコンサートを実現させるために必要な運営力、③自分たちが日々練習してきた成果を外へ発信する発信力、といったことを学ぶことができた。

3. 課題および改善点

音楽貢献実践での取り組みを通して、学生はただ演奏の技術を学ぶだけでなく、演奏するために必要な企画・運営といったことの重要性や、そのために必要なスキルを学ぶことができたと考えられる。ただし、このことについては、客観的なエビデンスに基づいて確認する

という点が不十分である。この点が課題であり、平成 28 年度には学生たちの学びを確認していくために用いる指標について、ルーブリック等の検討を行なっている。今後は、これを整備し、活用していく必要がある。

2. アクティブラーニング研究部会の取組

淑徳大学

2.1 アクティブラーニング研究部会の目的

2.1.1 研究部会の目的

大学間連携共同教育推進事業（以下、「連携事業」。）では、教室内におけるアクティブラーニングを推進する為、連携4大学でアクティブラーニング研究部会を立ち上げた。このアクティブラーニング研究部会は「HIP（ハイ・インパクト・プラクティス）を充実することを目的として、各連携大学のアクティブラーニングの導入率と質の向上を高める」ことを目的とし、平成27年度は、特に大規模教室におけるアクティブラーニングの取組事例や課題および効果の検証を4大学が連携して行った。

2.1.2 研究部会目的の背景

連携事業は藤木（2015）によると「各大学が自らの使命や教育理念に基づいて掲げたディプロマポリシー（学修到達目標）の達成に向けて、体系的な教育課程を構築し、教育方法を改善し、教員間・科目間の連携を図り、学修成果の測定方法を可視化して、組織的な教育を実現する（p.3）」を目的としている。また①HIPによる教育方法の充実、②学修成果の評価方法を開発し、可視化する、③組織的教育を可能にする教学マネジメントを確立するとした3つの柱があり、本研究会ではHIP⁸による教育方法の充実を図る役目を担っている。また本取組は定量的な達成目標が定められており、その一つとして、「アクティブラーニングを導入する授業数を初年度から5年間で50%増加する事」を掲げている。

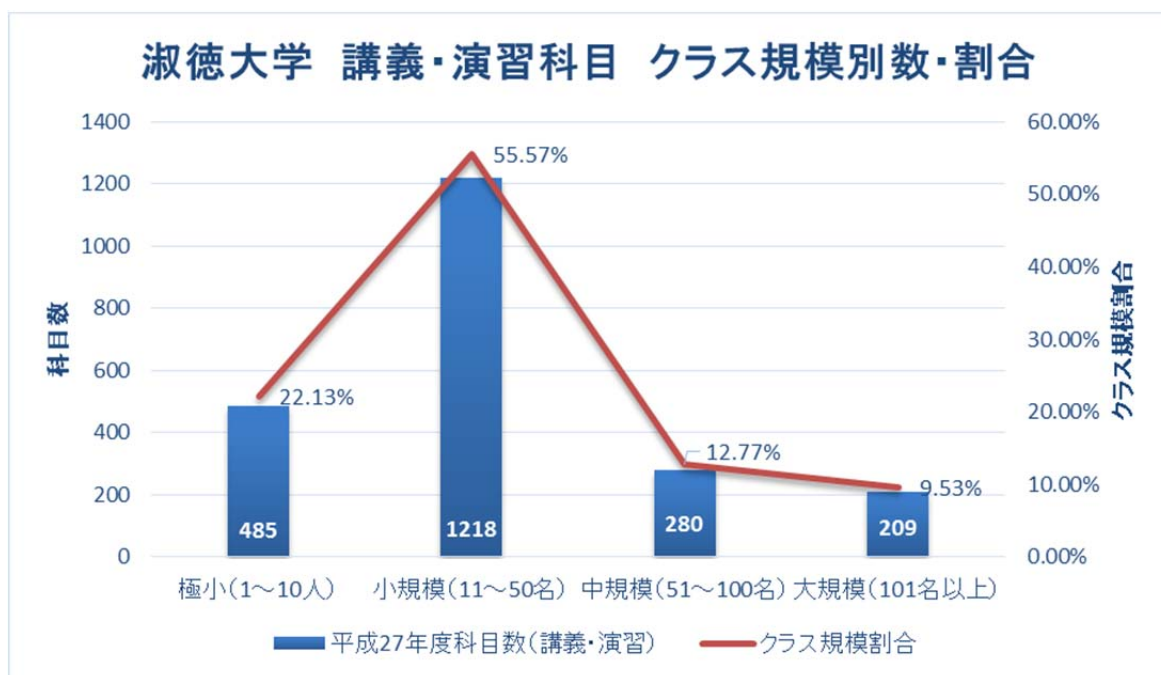
連携事業では、アクティブラーニングを進める為に、2012年～2014年にかけて①グループワーク、ディスカッション、プレゼンテーションなどの授業運営を行う事ができるようFDを実施、②「学生の主体的な活動と学修成果の獲得を意識したアクティブラーニング型授業の要件策定⁹」に取り組んできた。また、連携4大学では各教員にアクティブラーニングの取組みに関する調査を実施してきている。この結果は、各大学の結果に差異はあっても、アクティブラーニングの導入は徐々に浸透している事が毎年度確認をしている。

しかし、淑徳大学では3年間のアクティブラーニング導入を進めた中で、大教室でのアクティブラーニング導入¹⁰に関して、どうすればいいかといった声が教員から寄せられ、平成26年度に行われた連携事業の外部評価の中で課題とした。

⁸ HIPには、教室内のアクティブラーニング（能動的学習）と教室外体験学習プログラム（調査型、インターンシップ型、サービ斯拉ーニング型）とを大別しており、本研究部会は前者の推進を担う。

⁹ 単にグループディスカッションといった手法の導入だけではなく、質を高めるための要件を設定した。

¹⁰ 淑徳大学では、大教室は固定机・椅子の教室が多い事も理由のであると考えられる。



図表 3－2－1 淑徳大学のクラス規模別数・割合

連携事業の4大学の中で唯一の中規模大学である淑徳大学は、平成27年度のクラス（授業）規模を①極小（1～10名）、②小規模（11～50名）、③中規模（51～100名）、④大規模（101名以上）と類型化すると、大規模は209授業であり、全体の約10%を占めている。大学としてアクティブラーニングを推進していくには、看過できない割合である。そこで平成27年度は、特に大規模教室におけるアクティブラーニングを主たるテーマとして設定をした。

2.2 アクティブラーニング研究会の取組

2.2.1 ワークショップの概要と内容

平成27年度の研究会は、次の概要にてワークショップを開催した。

- (1)日時 2015年8月6日（木）13：00～16：30
- (2)場所 淑徳大学 千葉キャンパス（連携大学は主にテレビ会議を使用して参加）
- (3)内容「大規模教室におけるアクティブラーニングについて」経験を共有し、共通の課題を発見し、その課題を解決するためのアイデアを集める。

また、同日の午前中は、淑徳大学が主催した大学間連携共同教育推進事業FDを「大規模教室におけるア



クティブラーニング」を諸演題として実施した。これは、午前中はインプットを行い、午後はワークショップを行うといった連続性を持たせる内容としている。

ワークショップの内容としては次の３点が主な内容である。

(1)クリッカーを活用した大規模教室におけるアクティブラーニングの意識調査

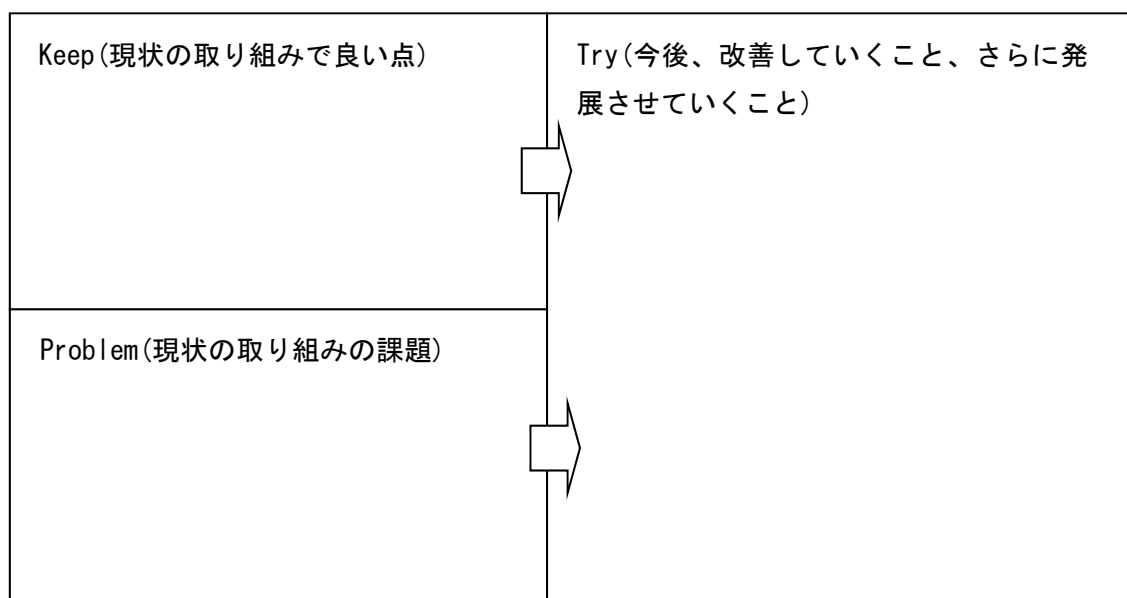
(2)グループ・ディスカッション（３テーマ）を実施し、各班ごとに発表

i) KPT (Keep,Problem,Try) 法（図表３－２－２）を活用した「取組んでいる（大教室）アクティブラーニングの内容、感想、課題」

ii) 「学生の自己効力感を高める工夫」

iii) ブレーンライティングシートを活用した「グループ・ディスカッションが苦手な学生への工夫」

(3)講評（小笠原 正明先生（北海道大学名誉教授・大学教育学会会長））



図表 3-2-2 ワークショップ KPT 法ワークシート

2.1.2 ワークショップでされた主な意見

研究会のワークショップでは、各班から設定された課題に対して、以下の意見の発表がなされた。

i) 大教室でのアクティブラーニングの課題について

この課題は、各教員が感じている課題、その為の解決方法案はどのようなものがあるか、実際に行っている参考となる取組みについて KPT (Keep,Problem,Try) 法を用いて議論を交わした（図表 3-2-3）。

図表 3-2-3 大教室でのアクティブラーニングに関する主な意見

課題	グループ作りが難しい、大人数では人手がたりない、評価が難しい、フリーライダーの処遇、グループによる話し合い等に出る、フィードバックが困難である、教室環境（構造）、大規模ゆえの個別フォローが困難
課題の解決方法案	学生の現状を把握する、学生個々のデータを把握（クリッカー、質問票）、話し合いのテーマの工夫、学生同士の関わりをもたせる、ファシリテーターをサポートする人員を配置する、授業公開を通じた相互評価（ライト・アクティブ・ラーニングという視点）を行う
参考となる取組み	事前学習の成果を（口頭やレポートで）発表させる、レポート、小テスト、グループワークの有機的関連、レポートのフィードバック、少人数グループ（2～3名）をやってから、大人数グループ（5～6名）で行う、事前学習で調べてきた内容をグループでシェアする、グループを途中でシャッフルする

ii) 「学生の自己効力感を高める工夫」

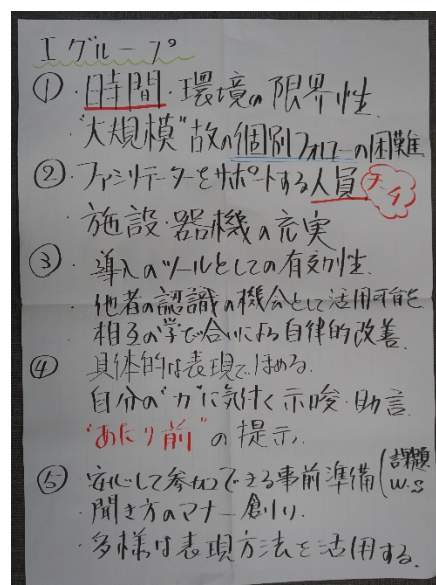
このテーマのワークショップの結果として、各班から出された議論の主な点としては次の4点である。

- ・動機づけのために、身近な課題から入り、解決の見通しをもたせる。
- ・目標を明確にする。
- ・コミュニケーションを促す
- ・発言を評価する（学生のピアレビューも含む）

iii) グループディスカッションへの学生への工夫

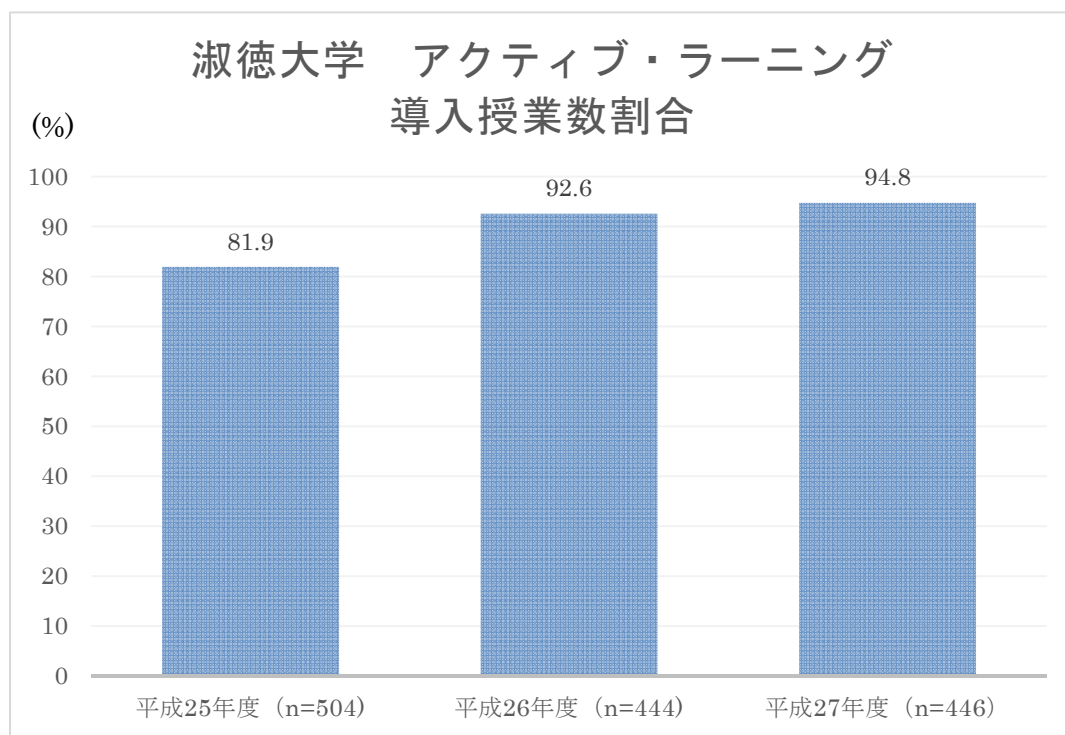
このテーマでは、ブレンライティングシートを活用し、グループディスカッションを苦手とする学生には、どのような工夫が必要かを議論した。主な意見としては、次の5つに集約ができる。

- ・テーマを具体的に設定し、準備させる
- ・選択肢を事前に用意する
- ・紙に意見を書かせる
- ・多様な表現方法を活用する
- ・傾聴を意識させること



2.3 アクティブラーニング研究会の成果と課題

この研究会の成果として直接結びつけ、因果関係があるとは断言はできないものの、研究会の監事大学である淑徳大学ではアクティブラーニング導入割合は年々増加している（図表 3－2－4）。



図表 3－2－4 淑徳大学 アクティブラーニング導入授業の割合

また、淑徳大学の学内年報に、「大人数教室でのアクティブラーニングの試み」を題材とした資料が投稿されるなどの取組みが見られる。しかし、今後への課題もいくつか考えられる。まず1つ目は、各大学が実施している授業アンケートからアクティブラーニング等の成果等について測定である。2つ目として連携事業で定めた「学生の主体的な活動と学修成果の獲得を意識したアクティブラーニング型授業の要件」を5年間の集大成として、総括を図り、どのように連携事業を波及していくかを検討することであろう。

参考文献

- 1) 藤木清、2015、「1. 本取組の3つの柱について」関西国際大学・淑徳大学・北陸学院大学・くらしき作陽大学『平成24年度文部科学省大学間連携共同教育推進事業「主体的な学びのための教学マネジメントシステムの構築」平成24～26年度事業報告書』pp.3-19.

3. HIP 学生交流部会

北陸学院大学 若山将実、辻 直人

3.1 学生交流会の趣旨

本事業の柱の一つであるハイ・インパクト・プラクティス（HIP）の充実は、アクティブラーニングやインパクトのある教室内外での体験学習など、学生が主体的に学ぶ教育方法の導入により可能となる。また、学修時間の実質的な増加と確保をも図ることになる。

連携大学では各大学のカリキュラムポリシーに沿った個別の取り組みをしてきた。それぞれの取り組みの発表をとおして、その成果を連携校間で共有すると共に、学生の立場からより良いアクティブラーニングのあり方を考える趣旨で企画した。

学生交流会は2015年度と2016年度の2回実施し、企画と運営は北陸学院大学担当した。

3.2 第1回学生交流会について

3.2.1 プログラム

・日時 2016年2月6日（土）10：30～12：00

・タイム・テーブル

10:30～10:32 HIP 学生交流会 趣旨（若山准教授）

10:32～10:35 開会の挨拶（北陸学院大学 学長 町田健一）

10:35～10:45 関西国際大学 取組発表（発表7分 質疑応答3分）
「フィリピンでの気づきと成長」

発表者：教育学部教育福祉学科子ども学専攻教育専修コース2年 秦美苗、福祉学専攻2年 岸本あおい

10:45～10:55 北陸学院大学 取組発表（発表7分 質疑応答3分）
「MIP（Mission Innovation Project）」

発表者：人間総合学部社会学科1年 野村朋希、2年 朱亀葵、谷田早耶、
中町史実

10:55～11:05 くらしき作陽大学 取組発表（発表7分 質疑応答3分）
「ヤングコンサート」

発表者：音楽学部 4年 杉山里緒、西澤佑佳

11:05～11:15 淑徳大学 取組発表（発表7分 質疑応答3分）
「地方創生グルメの開発について」

発表者：コミュニティ政策学部 3年 上原佑生、水野智尋

11:15～11:20 休憩

11:20～11:50 ディスカッション「学生にとって本当に望ましいアクティブラーニングとは何か」

11:50～11:55 総評（関西国際大学 学長補佐 藤木清）

11:55～12:00 閉会の挨拶（北陸学院大学短期大学部 副学長 朝倉秀之）

3.2.2 ディスカッションについて

取組発表の後は、休憩を挟んでディスカッションを行った。そこでは、各大学の学生が他大学の学生に下記のような質問が出され、学生間で活発に交流している様子が窺われた。ただし、時間に制約があり、もう少し時間が欲しいところであった。

- ・地域を創生するということはそれで地域の「幸せ」を生み出すということか（関西国際大学⇒淑徳大学）
- ・地域貢献コンサートの内容について（北陸学院大学⇒くらしき作陽大学）
- ・地域限定メニュー開発以外の活動はあるのか（北陸学院大学⇒淑徳大学）
- ・MIPのグループ活動について（くらしき作陽大学⇒北陸学院大学）

3.2.3 学生の反応

学生交流会後、各大学の学生から今回の学生交流会について、下記のような感想が寄せられた。

- ・各大学のプロジェクトでの題材が違っていたので、意見をするときを考えることができました。自分たち以外の大学のプロジェクトを見て自分たちの考えに深みを持たせることができる経験になったと思います。
- ・発表をしているときに、遠隔をしているので本当に伝わっているのかと少し疑問に思いました。発表の題材に差があるのかなと率直に感じました。題材自体に統一性を持たせることも必要であるのかなと思いました。
- ・「地域貢献について」が印象に残った。私は普段、福祉を学んでいるため、福祉的な視点でしか考えることができなかったが、違った角度から考えることができる良いきっかけとなった。
- ・プレゼンの発表を行うには遠隔会議などの力を借りるのもいいが人が人に伝えるほうが伝えるほうも伝えられる方も伝わりやすいのではないかと感じた。
- ・プレゼンによっては、聞きやすいもの、もっと聞きたいと思うもの少し聞きにくいと感じるものもあったため、プレゼンの聞き手の立場に立って考える必要があるということに改めて気づくことができた。
- ・学生交流会の主旨が学生としてはわかりにくかった。この会は学生のためというより、むしろ先生のための会なのではないか。
- ・遠隔会議だったので、人前で発表する緊張感があまりなかった。

- ・各連携大学の準備とやる気に差があったように思います。私たちは見やすいスライド作りや発表リハーサルをするなどして入念に準備しましたが、他大学によっては学生が休んでいたり、ぶっつけ本番でスライドをただ読んでいるだけの場合もあり、残念だった。

3.3 第2回学生交流会について

3.3.1 プログラム

- ・日時 2016年9月30日（金）13:30～15:00

- ・タイム・テーブル

13:30～13:32 HIP 学生交流会 趣旨（辻直人 教授）

13:32～13:35 開会の挨拶（北陸学院大学 学長 町田健一）

13:35～13:45 関西国際大学 取り組み発表（発表7分 質疑応答3分）

「司法機関に対する信頼度・少年犯罪の原因帰属・厳罰傾向における日本とミャンマーの差異」

発表者：人間科学部人間心理学科 大田舞

13:45～13:55 淑徳大学 取り組み発表（発表7分 質疑応答3分）

『18歳選挙権』選挙を終えて」

発表者：コミュニティ政策学部 矢尾板ゼミ

13:55～14:05 北陸学院大学 取り組み発表（発表7分 質疑応答3分）

「乳幼児理解を深める赤ちゃん・サロン」

発表者：人間総合学部幼児児童教育学科 塚田龍之介 杉山裕子 小久保愛美 森田将史

14:05～14:15 くらしき作陽大学 取り組み発表（発表7分 質疑応答3分）

「広がり続けるステージ」

発表者：音楽学部音楽学科 越智亮太

14:15～14:20 休憩

14:20～14:50 ディスカッション

（テーマ）「学びを深めるには」・「意味のある学びとは何か」

14:50～14:55 総評（淑徳大学 矢尾板俊平 准教授）

14:55～15:00 閉会の挨拶（北陸学院大学 副学長 朝倉秀之）

3.3.2 ディスカッションについて

冒頭で回線接続上の不具合があり、10分ほど遅れての開始となったため、全体的に時間がずれてしまった。途中でも回線が切れるなどで時間が遅れ遅れになってしまった。接続については十分確認したはずであったが、機械の不具合は十分過ぎるほどのチェックとリハーサルが必要である。連携4大学による取り組み発表を初めに行い、その後休憩を挟まずにディスカッションを行われた。特に、アクティブな学びによって、何を育てたのか意見を述べあった。

関西国際大学の学生からは、グローバルスタディに参加して、専門で学んでいる心理学を座って講義を聴いて頭で理解しているだけでなく、実際に調査で使えるスキルとして身についたという感想が聞かれた。

淑徳大学からは、臨場感を伝えるような文章の難しさを実感したという声が聞かれた。北陸学院大学では、学生同士で話し合って、環境設定も一から自分たちで作らなければならないことが自分の力になっている、という意見が出た。継続して実施することで、次への自己課題やチームワークを改善していけるということであった。毎月の取り組みで、赤ちゃんの成長を実感できることも語られた。

くらしき作陽大学からは、大学で学んだことを外での演奏活動に活かせる、周りの人たち演奏を聴いてもらい評価してもらえることが、自分の演奏を振り返るきっかけにもなるとのことだった。

実感を伴う学びが「学び」を深めていること、継続的に活動することでより自らの活動を客観視できることが学生の声から伝わってきた。

3.3.3 学生の反応など

学生からの声

- ・他大学のプロジェクトを見て、様々な方法による実践的な学びがあることが分かった。
- ・発表の方法やプレゼンテーションのあり方について学ぶことができた。特に、各大学からの質問に対して、適切に応じようとしている発表者の姿から、人に対応することや伝える手段を学ぶ機会となった。
- ・自分たちは教育・保育分野であるが、文化・政治を題材にしたプロジェクトにおいても人との関わることや環境のあり方等を検討している点では、実践を通した振り返り・改善など、自分たちの学びを深めていることプロセスでは共通したものがある、と詳しく語られている内容から理解できた。
- ・遠隔で画像を通した発表では、初めて会う学生であるにもかかわらず、画像・音声から届けられる発表者の学生の思いや考え、特徴を考え知ることができ、画像上ではあるが親しみを感じる出会いとなった。
- ・リハーサルを念入りに行っていたので、途中のアクシデントでも、柔軟に考えて対応することができたが、他大学では、下書き通りの発表もあったように感じた。

担当教員からの声

- ・本学の場合、スタッフは有志であるため、もともと保育への関心が高い学生が参加しているものの、保育者として就職する意志が強い学生にとっては、この活動を通して常に保護者とかかわることも含めて「保育専門職」の意識が高まり、サロンでの活動時を中心に、教員の指示がなくても率先して動く学びとなる。この点において、企画力・対応力も身についてきていると思われる。また、3年生は4年生の指示で動いているため、

全体に指示待ちの様子となるが、1年後には現4年生と同様の成長がみられることが期待できる。

- ・本学の課題および改善点としては、大学が行う子育て支援は、単に場所の提供で終わってはならない。学生には、大学における学びと経験を往還させることで、実感を伴った学びとなることが期待できる。参加保護者には、子育てを楽しみかつ自信を得るような場であり、前向き志向の生き方支援となることを目指したい。

学生の学びに関しては、教員の指示で動くのではなく、学生スタッフ同士の連携、協力も学びの重要な要素である。今後は大学と地元自治体との連携により、双方の利点を活用した総合的な子育て支援のあり方について検討が必要である。

3.4 成果

以上、これまでに2回のHIP学生交流会を実施した。その成果として、次のような点があげられる。

- ・自分たちの実践的な学びを人に伝えることによって、学生にとっては、より鮮明に自己の学びを実感することができる機会となったと考えられる。
- ・日々の授業では、気心知れた中で行う多少気の緩みのある発表となるが、画像を通して行う発表は、緊張感もあり、また伝える意識を高めることにつながると考えられる。
- ・違う分野で各大学の学生たちがそれぞれに学んだことを自分たちの経験を通して言葉で伝えることによって、自らの学びを振り返る機会となった。学生の立場からより良いアクティブラーニングのあり方を考えられた。
- ・学びを深めることの大切さや、経験を通して学ぶことの意味を考え、それぞれの言葉で語ることができた。

以上の成果に加え、大学における学びとして、インパクトの強い教育方法を導入する意義を参加学生自身が再確認することができたことは意義深いと考えられる。この交流会の開催にあたっては様々な課題が出てきたことも言える。今後このような交流会のあり方について検討する必要がある。